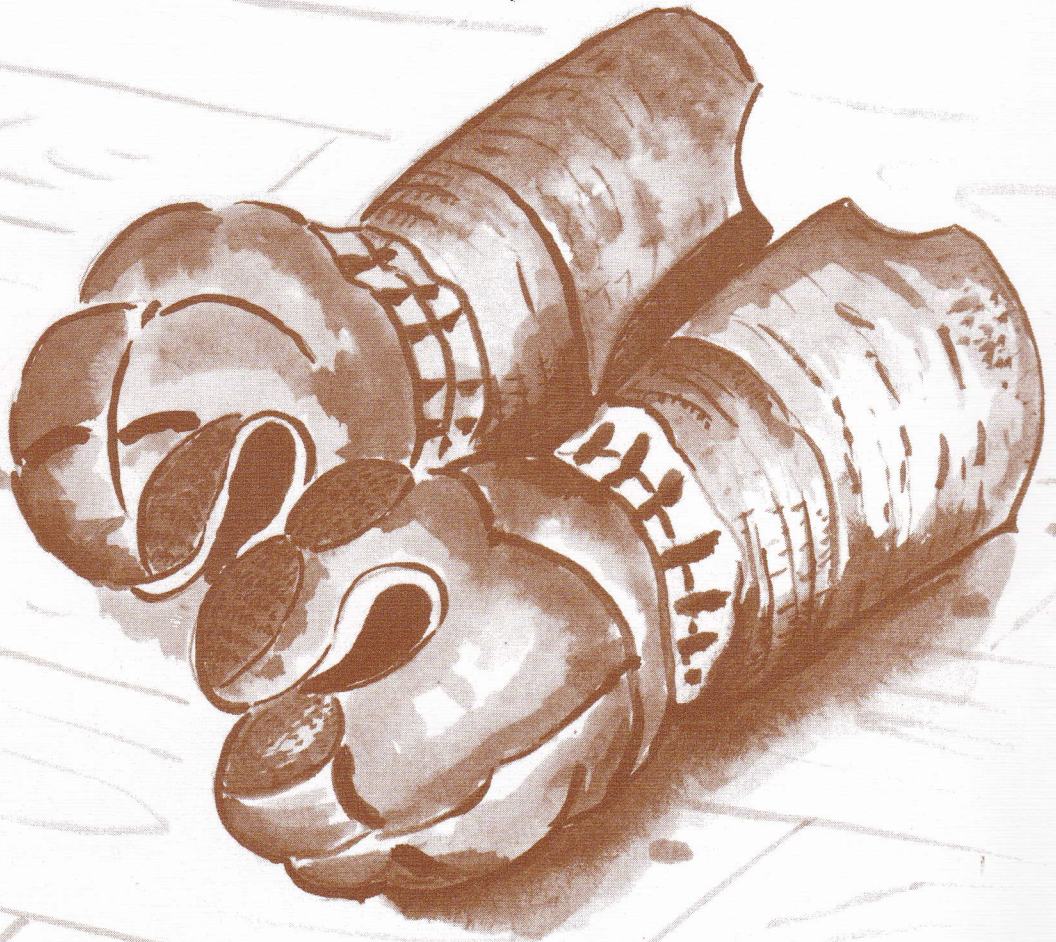


徳島市中徳島町2丁目96番地
徳島県剣道連盟
〒770 電話(0886)52-2337

徳島の 剣道

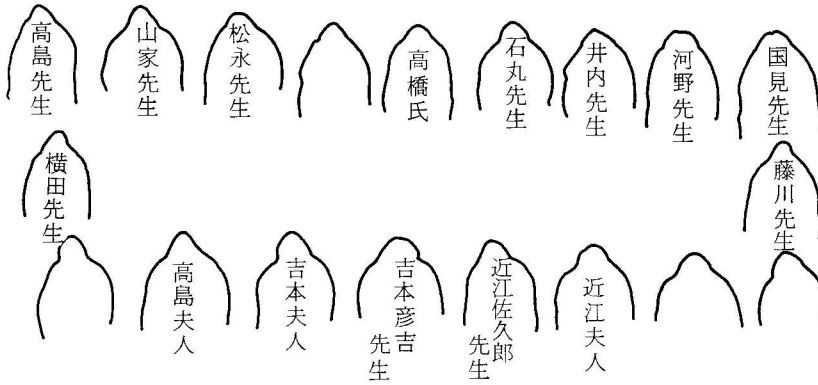


第 7 号

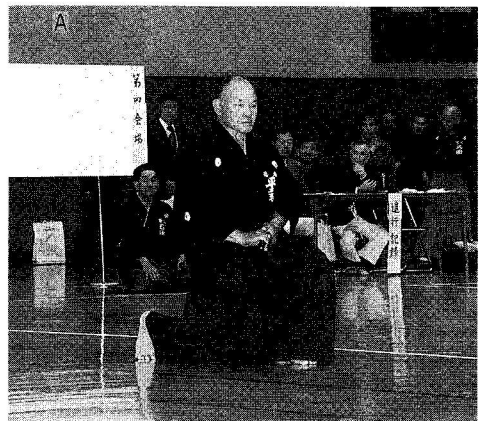


徳島県剣道連盟

思い出の写真 昭和14~15年頃



平成2年6月16日四国高校剣道大会四連覇をはたした
富岡東高の選手



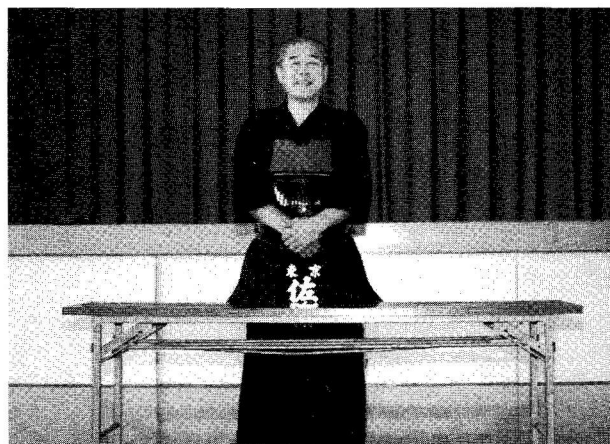
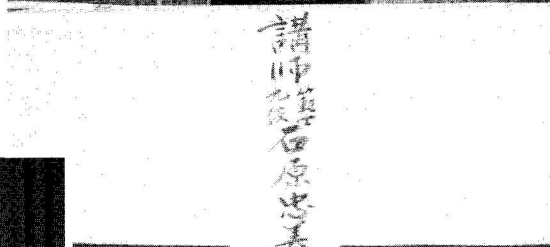
平成2年5月居合道八段合格平尾勝美先生の
演武(平成2年12月2日第32回大阪居合道大会)

第20回全国中学校選抜剣道大会に出場→
した徳島県選手



←第11回中倉旗（内閣総理大臣杯）争奪剣道選手権
大会第3位に入賞した近藤巨選手

秋季剣道講習会 講師範士九段石原忠美先生→



←48国体アドバイザーコーチに就任された
範士八段佐藤博信先生

卷 頭 言

徳島県剣道連盟会長 堀 江 幸 夫

「剣は人なり、剣は心なり」は、昔から剣道人であれば必ず口にする言葉である。そして全剣連においても剣道の理念を「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」と定義している。即ち剣道の修業をとおして剣道人は「すべからく人品高かるべし」をめざすこととし、人間性の向上なくして剣の完成はないと説いている。

この人間形成の道とは申すまでもなく財産や地位の如き見せかけのものではなく、自然に生きる人としての高潔さを求める道である。

吾々は日々の修練の中で「打つ」という動作を反復しているがその一本一本の打突の中に、オーバーな申しようであるが「自らの人生を賭けて」いなければならぬ。それは単に当てるための打突でなく、打たなければならぬ必然性の具備された打突、すなわち天地自然の理法にかなった打突であり、その打突に自らの人間性が深く沈潜し、それが相手の心に昇華していくところに一本の打ちの尊さがあるといえるのである。

島田虎之助は「剣よく人を打つに非ずして心よく人を打つ」と残しているが、これは誠に至言である。体の技より心の技がより大切であることは当然で、又至難なことは申すまでもない。蛇足であるが体の技は身体的条件が整えば可能だが、心の技はこれらの条件を超越し高潔な人間性が備わってはじめて使えることができる技であることを銘記すべきである。

剣道を精神文化の粹と誇るならば、現状より一段次元を高め茶裡飯裡、常住坐臥において只管ひたすらに剣の理法を求め、人間形成に努めることが剣道人の課題であり、この努力なくして伝統文化である剣道の繁栄はない。

目次

巻頭言	1
わが郷土の剣豪紹介(各支部より)	8
剣道随想 文武不岐	9
剣豪紀行	12
人物紹介(各支部より)	15
新人紹介	19
道場紹介	20
徳島の剣道(各パートからの報告)	23
四国高校剣道大会四連覇をはたして	24
第20回全国中学校選抜剣道大会に出場して	25
第37回全国高等学校剣道大会	25
福岡県々とびうめ国体に出場して	26
第11回中倉旗(内閣総理大臣杯)争奪剣道選手権大会に出場して	26
第十二回全日本高齢者武道大会に参加	27
第三回全国健康福祉祭びわこ大会に出場して	28
第二十五回全国居合道大会	29
河野照雄先生を偲ぶ	29
久保 勇先生を偲んで	30
松本一城先生を偲んで	30
森口 求先生を偲んで	31
平成二年度中学生優秀選手	31
剣道振興功労者表彰	33
平成二年度戦いの跡	33
平成二年度昇段者名簿	34
平成三年度剣道・居合道昇段審査学科試験問題・解答例	45
平成三年度徳島県剣道連盟役員一覧表	72
平成三年度徳島県剣道連盟行事予定表	75
平成三年度段級審査実施計画表	77
徳島県剣道連盟審査資格・審査料等	78
河野基金創設	79
編集後記	80

△表紙▽
 題字 堀江幸夫徳島県剣道連盟会長
 絵 香川久次徳島県剣道連盟理事

わが郷土の剣豪紹介(各支部より)

〈鳴門支部〉

蜂須賀藩剣道師範 武田長年

前 林 利 雄

清和天皇二十五代後胤武田河内守長光を始祖とす。長光は、幼名輝季。その実は、三好筑前守長輝の三男の弟にして、母は甲州武田の長女なり。故に姓を武田と改む。十三代九郎左衛門の長男として、天保十年十一月四日鳴門市大麻町川崎に生まれた。幼名を亮太郎後に長年と改む。嘉永元年より武道に志し、初めは貫心流の師範小澤金助に就いて手ほどきを受け、後に直指流の師範浅野辰太郎、心影流の剣客岡山の藩士阿部右源次、貫心流宮田派の元祖宮田熊藏等に指南を受けてますます技量を伸ばしついに、浅野家より直指流の允可皆傳を受けた。その間四国、中国、その他の諸国を遊歴して修業を積み、明治二年三月蜂須賀藩の剣道教授方平士に推挙せられ、勤中小奉行格に列せられ、三人扶持と支配七石を賜り明治三年十二月剣道一等助教に進み米二十六石を賜る。明治四年の廃藩置県の後、徳島市佐古にて大里長を勤めた後、板野郡書記及び鯛浜外六カ村戸長、板東村長等を勤む。明治二十六年神戸に出て宮前町に道場を開き指南すること十有数年、門下に出ずる弟子数百人。その間神戸中学校及び兵庫警察署、兵庫師範学校の教師を嘱任せられた。明治二十九年五月帰郷に臨んで記念に写真額及び銀盃を贈られる。その後、明治四十一年三月大日本武徳会徳島支部委員となり、明治四十四年十月総裁宮貞愛親王殿下より剣道教士資格を授けられる。明治四十四年八月撫養中学校の懇請により剣道教師となる。翌年四月助教論に進み、大正六年十月一日八十歳の高齢を以て歿せり。法名 「華國院松月瑞州居士」 鳴門市大麻町川崎の西願寺に墓がある。



(写真二) 國浄山眞竜院西願寺の墓所
墓碑銘 華國院松月瑞州居士
場所 鳴門市大麻町川端 東貞方
板東線の川崎警察官駐在所より東50m



(写真一) 徳島藩剣道師範 武田長年 享年八十歳

〈小松島支部〉

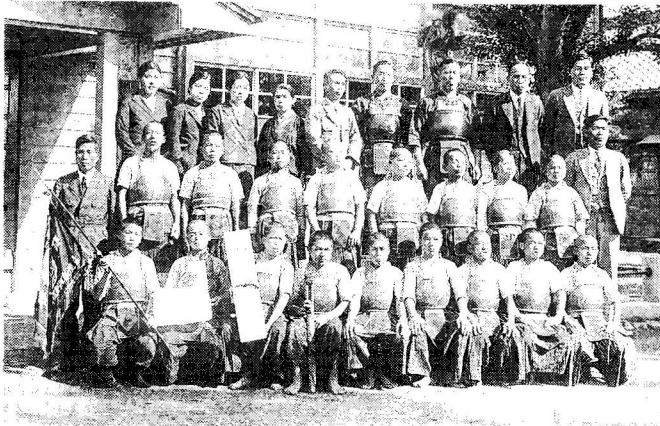
剣道範士 石丸米藏先生の胸像

(小松島市立江小学校)

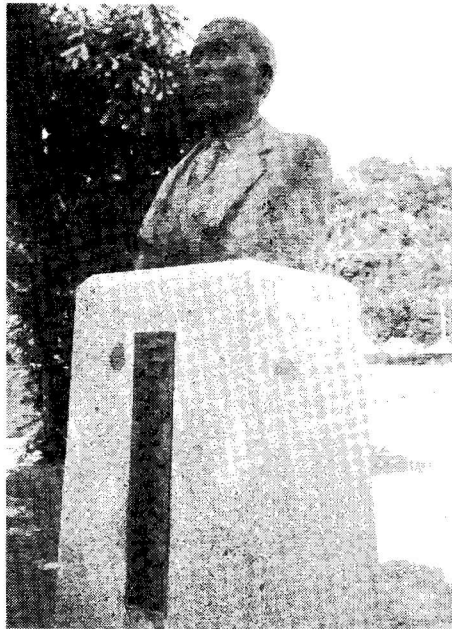
田村直一

石丸米藏先生は明治二十二年二月十五日小松島市立江町字向山「山越竹藏」氏の四男として、明治四十一年徳島県師範学校卒業後、母校立江尋常高等小學校に奉職し大正十二年校長となり、昭和十二年勇退されるまで郷党子弟の教育に尽瘁すること三十年、先生至誠をもって生涯を貫かれ、南山と号して和歌、俳句の道にも楽しみました、専ら剣道の修業に専念せられた。

「木刀体操」を独創され、児童生徒に教えられ、ひろく地域の学校にも奨励された。立江小学校がいつも県内小学校剣道大会に於て優勝の栄を得られたのはその影に先生が日夜斯道教育に精魂をこめられた賜であった。私も昭和七、八年頃先生の指導による錬成会に参加したが厳しいなかに心をこめられた細やかなお教えを頂いた。なかでも「常在剣道」の精神、心構え、人生哲学について



後列右端2番目より左へ立江小学校校長、石丸先生、
笹倉太郎先生



「写真参照」
石丸先生の胸像
一九五九年五月建立
(小松島市立立江小学校校庭)

訓示された。いちど面を着けられたら終わりまで(何時間でも)面をとらなかつた。ククチヒゲのお顔がクヨイ面打ちができるとクヨシッ"と強い声でクエミクをたたえながら励ましていただいた。県下一円にわたり門下生が多数で幾多俊秀を輩出している。

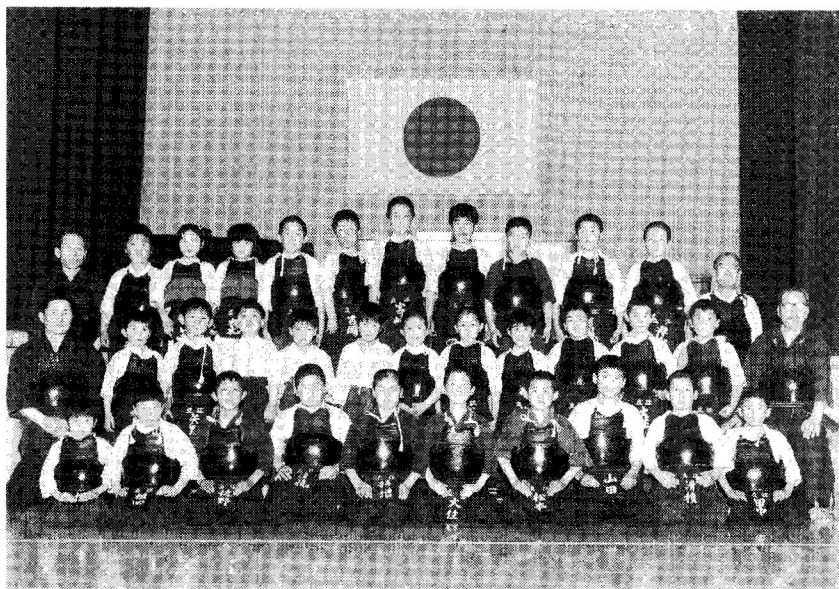
立江自彊会(剣道修業団体)の初代会長として献身的に活動され(浜田格二、増田弘一、早川一也、樫福 稔、船崎 明、船崎新二、山越常石氏等)多くの剣士が活躍された。

徳島県剣道連盟理事長の要職に在りては、よく理合についての技を教えられ小松島市剣道会の戦後の剣道復活についても後進にその日標を教示された。昭和二十七年小松島市初代の教育委員長として戦後混乱せる教育界の浄化につとめ、このほか保護司、文化財保護委員となるなど、各方面に幾多の功績を残された。

昭和三十四年二月二十七日忽焉として急逝された。時に、齢七十歳歿後剣道範士八段の追号を贈られた。

いまま先生の胸像が立江小学校の前庭に在り後につづく郷里の子等に「頑張れ」と呼びかけている。(写真参照)

現在立江小学校の剣道クラブの指導者は、石丸米藏先生の実家（山越竹藏氏の子孫）の山越常右（公民館長）氏がクラブを創立され、山越 徳氏と共に連綿として一族をあげて剣の道を教えられている。同じく榎淵小学校においても早川一也氏が剣道教室を開設され後進の指導にあたられていて、石丸先生の常在剣道の精神が脈々として地域にうけつがれ私どもを励ましてくれているのである。



立江少年剣道教室

〈阿波支部〉

範士 山根 正雄

坂本 裕二



(写真一) 山根正雄

貫心流正統継承者であって多くの著名な子弟を育成した、山根正雄（写真一）は、今から約、五〇年前天保十一年（一八四〇）十一月三日名西郡高原村関（現石井町）で、山根武五郎の長男として生まれた。

山根家の先祖は山口氏で、戦国時代の末、天正十年（一五八二）播州赤穂から出て、当時龍野の城主であった蜂須賀氏の家老長

谷川貞安に任えた。同十三年（一五八五）長谷川氏に従って入国、阿波の高原村に居住した。その七代目山口作十郎祐輔（写真二、法名無相軒心海徹翁居士）は剣術の達人で多く門弟を教授していた。

作十郎は寛政年間（一七八九—一八〇〇）麻植郡桑村（現川島町）の稲田家臣杉山某を養子として、分家して山根姓を名乗らせ、専ら剣術の指導に当たらせた。杉山家は尾張出身で稲田氏に従って入国した譜代の家臣で代々剣術指南の家柄であった。山根家は初代某、その子入藏（写真三）、その子武五郎（写真四）、その子正雄（戸籍名政雄）とい

ずれも貫心流を修め



(写真二)

山口家七代山口作十郎祐輔
法名 無相軒心海徹翁居士

稲田氏の家臣たちに武芸を教えていた。

正雄は天賦の素質の上に、幼少から父の薫陶を受けて、頭角を現したが、さらにその技を磨くために寛政四年（一八五七）一月十七歳の時、父の許しを得て武者修業の旅に上った。まず、芸州広島に赴き、藩の剣術指南細六郎義知（写真五）の門をたたいた。細六郎は阿波出身で同じ貫心流の三百余の門弟を抱え中国地方にその名を知られた剣士である。正雄は昼夜熱心に稽古に励み、師もまたその技や人格を愛し、且つ同郷の誼もあって、特に目をかけて指導したのでめきめき上達し、一年後には門弟中十指の内に数えられ代稽古をするほどになった。

安政五年（一八五八）十八歳の正月、さらに剣の蘊奥を求めて、細家を辞し、周防の国（山口県）岩国、徳山を巡り、備中備前など山陽各地から、四国の伊予、讃岐、土佐などの有名な道場で、その技を磨いた。その間周防国熊毛郡三笠の貫心流宗家宍戸家を訪ねて直接その教えを受けた。宍戸家では正雄の技と人柄を賞し、貫心流開祖宍戸司前家俊の画像一幅（写真六）を贈って激励した。これは現在でも山根家の家宝として大切に保存されている。

また備前の国岡山では藩の師範、直心影流の阿部左源次の道場で奥村左近太、讃岐丸亀京極藩の島村勇雄等の教えを受けた。

そして安政四年一月十七歳の時家を出て文久元年（一八六一）夏二十一歳の時まで満四年修業して我が家に帰った。

その後郷土で稲田家臣や地方の青少年に剣の道を教え、ひまをみて京阪の各地を巡り、江戸へ出ては北辰一刀流の達人神田お玉が池の千葉周作の道場へも訪れている。

その間阿波郡久勝村川人春次二女「こう」を娶り居を阿波郡久勝村に移し道場を開いて子弟を教えた。（写真七）この附近は稲田の家臣が多くて剣術を習う者多く、また妻女の実家が近かったため転居したと言われている。

慶応三年（一八六七）九月正雄二十七歳の時尊皇佐幕開国攘夷等で世情騒然とした時、稲田家の命によって京都に上り、御所の警備に当たったが、その時ひまを見ては二条城近くの大野清左衛門の一刀流道場に通り、各国から集った剣士たちと試合して剣の修業を怠らなかつた。

明治元年（一八六八）正雄二十八歳の正月、鳥羽伏見の戦が起こり続いて

稲田家は東征総督有栖川宮熾仁親王をお護りして東下したが、正雄は任を終えて帰り郷土の治安や青少年の指導に当たった。その後、世情が安定したので専ら後輩の指導に尽くした。

明治二十九年（一八九六）大日本武徳会徳島支部創立に尽力し地方委員となり、明治三十年には常議員に推された。

さらに明治三十五年（一九〇三）六十一歳の時武徳会総裁小松宮彰仁親王から三等有功章を授与され、ついで徳島支部教授となり、徳島県立徳島中学校、徳島師範学校の剣道教師となって生徒たちの指導に当たった。明治四十年（一五〇八）五月六十八歳の時教士の称号を受けた。

明治四十五年（一九一二）皇居で御前試合が催された時正雄は指定選士に選ばれ、出場の栄に浴した。後全国名人二十人の一人に指名された。大正十年（一九二一）八十一歳の時武徳会より剣道最高位の範士の称号を与えられ、名実ともに徳島剣道界の第一人者となった。

大正十四年（一九二五）徳島市富田五番町の仮寓でその輝かしい生涯を終えた。享年八十六歳。

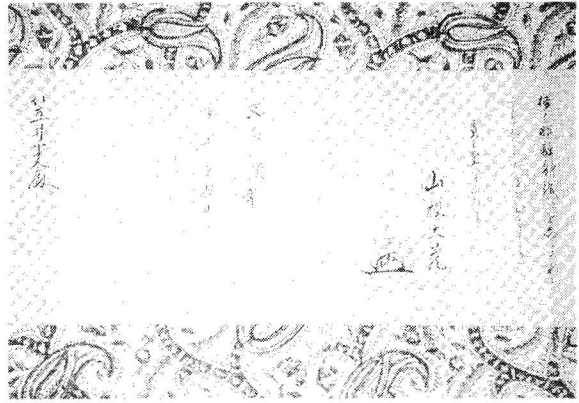
法名 榮盈院正道義顕居士

名西郡高原村関の先祖代々の墓地に葬られたが、墓はその後徳島市二軒屋町観潮院の境内に移された。（写真八）また境内には貫心流最高継承者近江佐久郎以下八名により立派な正雄の碑が建てられた。（写真九）

山根正雄は武芸の家に生まれ、貫心流の流名のように八十余年天寿を全うするまで剣の道一途に終始一貫精進を怠らず自己の修養に努めると共に多くの子弟を教導した。

思うに近世徳島剣道界の基礎は氏によって築き上げられ、これを継承し門葉の発展に尽くしたのが阿波郡出身の近江佐久郎（前号「徳島の剣道第六号」に記述）である。

正に阿波郡こそは近世徳島の剣道の発祥地であると言っても過言でなからう。



(写真三)

祖父山根大藏門弟笠井半太(笠井選氏の祖祖父)に与えた貫心流の

免状

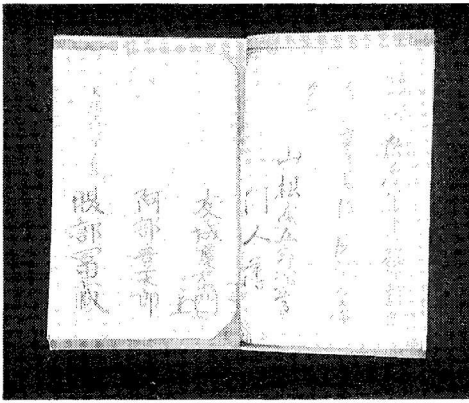
貫之堂八十三翁書

山根大藏

正滿

文久癸年

亥八月吉日



(写真四)

父山根武五郎滿学の門人簿

友成慶右衛門

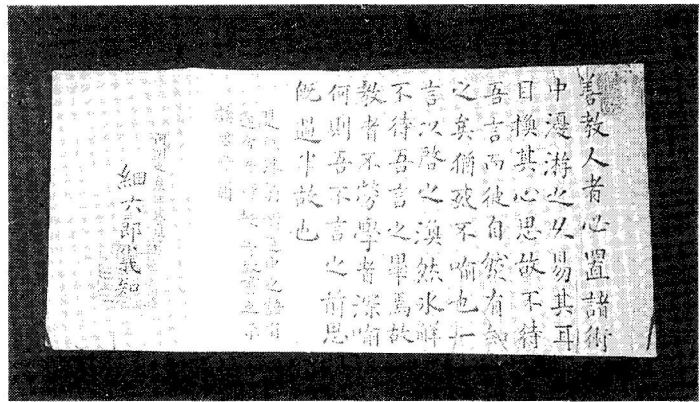
久知

阿部豊太郎

服部富藏

以下三百九十八名

記載



(写真五)

善教人者心置諸術中漫游之从易其耳目換其心思故不待吾言而彼自然有知

之真猶或不知也一言以啓之渙然冰解不待吾言之畢焉故

教者不誇學皆深喻何則吾不言之前思既過半故也

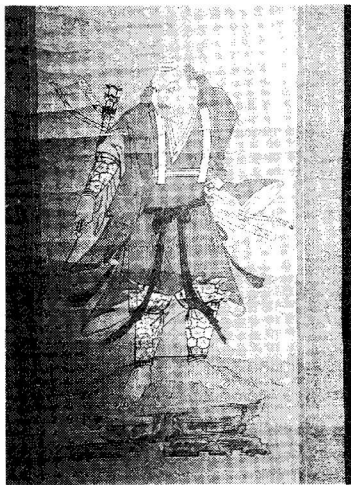
中漫游之以易其耳目換其心思故不待吾言而彼自然有知

之(以下略)

阿州三産住藝

細六郎義知

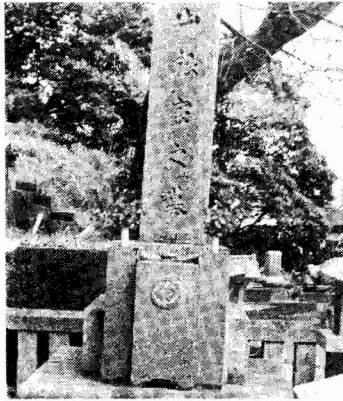
細六郎義知



(写真六)

尖戸家より正雄に与えた、貫心流

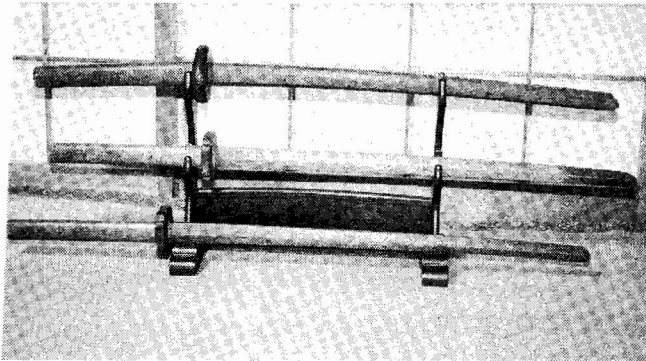
開祖尖戸司箭家俊の画像



(写真八)
徳島市二軒屋観潮院境内 山根家
之墓



(写真七)
阿波郡久勝村にあった正雄の旧屋
敷(現在新居繁利氏宅) この納屋
の敷地に4間×6間の道場があっ
た。



正雄の使用した
貫心流木刀



(写真九)
観潮院境内の山根正雄の碑

〈麻植支部〉

天心流兵法 住友治五右衛門吉正

森 本 康 平

住友治五右衛門吉正は、延宝八年（一六八〇）二月四日西川田村庄屋五助正高の二男に生まれ、正徳二年（一七一二）三月二十三日三十二歳で天心流兵法の免許を受けた。師の名が記録に見えないのが残念である。門弟には原士伊沢新八、武岡実之次などがあり宝暦元年（一七五二）三月、兩人に免状を与えているから一流の剣士であったのであろう。

治五右衛門は六尺近くあったといわれ、少年のころより相撲巧者で、長じて「川田の一本」といわれ、相撲で知られた人であったが、天心流兵法の免許であることを知る人は少ない。

剣士としての治五右衛門の逸話をあげたいが記録に見当たらないので相撲について簡単にふれてみることにする。

元禄十三年（一七〇〇）八月二十四日、徳島城内において行われた御前相撲に召し出されるなど、若くて相撲の力量は藩内に知られていた。同十五年三月治五右衛門は、讃岐の大関相引森右衛門にすめられ「相生」というしこ名で京大坂の勲進相撲に同道、関脇、小結を倒し一躍畿内に知られるようになった。

翌十六年十一月には、紀州公の御前相撲に召し出され、当時天下一といわれた大関大山次郎右衛門、紀州公のお抱え力士鏡山仲右衛門、前頭山藤潮右衛門に勝った。この時紀州公は治五右衛門を大変お褒めになり「なんじは、天下第一の相撲取りである、以後一本と名乗れ」と仰せられ羽織、萌黄縹子の締込み、白銀十枚を下された。

宝永二年（一七〇五）五月、治五右衛門は大坂の勲進相撲を最後に高越山に登り神前で「朝顔や百日紅は恥多し」と発句を詠み二十六歳で相撲を止めた。記録に見えないが剣の道に精進するようになったのは、このころかと思われる。正徳五年（一七一五）六月一日、兄長太郎が夭折のため家督を相続

した。

庄屋としての治五右衛門は、他国米制道役、吉野川材木留役、享保十七年（一七三三）九月二日には老家組頭庄屋を仰せ付けられ、その後、難民救済の功で賞せられるなど民政につくした人であった。

本文は西川田村庄屋住友家三代五郎右衛門正春から六代嘉七郎正武まで四代に涉って、日記風に書き継がれた記録によった。治五衛門は幼名宗徳長じて五右衛門、後（宝永三年）治五右衛門と改名、住友家五代に当たる人である。

〓 剣道随想 〓

文武不岐

事務局 藤 本 辰 夫

「文武不岐」はあまり耳慣れない言葉ですが、師からこの言葉を教えていただいたときから私の座右の銘となつてしまいました。「文武」は一般に学問と武芸のことですが、ここで学問とは見たり聞いたり本を読んで学ぶことであり、武芸とは実際に行つて経験することいわゆる行を通じて学ぶことです。そして、「不岐」が分けることができない意味から、この言葉は「文」と「武」は分けることができないという意味であり、文武両道より強く厳しいニュアンスが感じられます。

ところで、最近の子供達の勉強は知識偏重に陥つているといわれ、社会経験など「行」の学習が不足していると思われれます。私達が一生懸命汗を流して剣道に打ち込んでゐるのは、現代社会に不足のこの「行」を補足することに意義を求めているのではないかと思うのです。したがつて、この剣道が持つ独特の良さを少年に十分に理解させることができれば少年剣道もますます盛んになり、社会も明るくなるだろうと期待するのです。

しかし、反対に私達剣道人は「行」偏重に陥り易く、「文」の学習が不足しがちであり、バランスのとれた人格形成が思うようにできません。ここに真の修業の難しさがあると思うのです。私は少年剣道を指導する者として、また自ら道を求める求道者として常にこの両者のバランスを保ちながら修業するよう心掛けたと思つており、この言葉を銘記してゐるのです。

剣道だけに限らず何事においても、この「文武不岐」の姿勢を忘れず、ともによくその道を求めることができれば、道を誤ることもなく、自然と調和した素晴らしい人生を送ることができるのではないかと思うのです。

混迷を深める現代において、剣道人自らが剣道に対する理解を深め広く世

間にそれを知らしめ社会教育に貢献していくことが私達剣道人の使命であると強く感じます。

「剣豪紀行」

——小次郎の燕返しツバメの秘法——

田村直一

◎ 「武藏の船は見えたか」

まだ武藏の船は見えませぬ。

「迎えを出せ」

と、焦ら焦らと佐渡は命じた。

「もう辰の刻はとつくに過ぎてている」

武藏は逃げたのではとの声がささやかれる。

陽の光と海風の中で、ゆるやかに時が流れて行った。

小次郎は、また試合場に定められた船島の平地の方へ、ゆっくりと歩いて行った。雑草の間に、黄色い花が見える。あとからついていった沢村新之丞シウジウがしゃがんで見て「浜ぐるま」であると言上する。その花を見おろしながら小次郎はふっと愛人の兔祢トネをおもい出していった。

「武藏の船が見えます。」と、かん高い声。

「来たか、武藏が」……

反射的に長岡佐渡は立ちあがった。

小次郎の白い顔が、瞬間、険しくなったがすぐに平静に戻った。

佐渡は、腰を上げずにいる小次郎と内膳の横顔を見ながら幔幕マンモクから急いで出て行った。陽は、空の真上にかかってきている。

一刻半またされた。

「新右衛門支度」

思わず激しくなった声をかけた。

小次郎は、袖無陣羽織を急ぎ脱いで床几に置き、袂タテから革紐カウヒモを出して襪ソックスにかけ、懐中の白い布を畳んで鉢巻をした。それから長光の長剣を受け取り左手にさげて、

「湯を」と、新右衛門に命じた。

武藏は渚に立ち遠くから幔幕マンモクに礼をした。

内膳は、遠くからではあるが、ギラギラと光を放っているような武藏の両眼を感じた。

武藏に近づくと小次郎も、いつもと変わらぬふつくとした顔色のままであるが、眼だけは、カッと鋭い光り方をしている。

小次郎が、足をとめた。

武藏も立ち止まった。

どちらも気合も発せず、ただ互いの眼を見合っている。

陽にやけた逞しい武藏の顔から次第に血の気がひくようにみえるが、両眼は飛び出しそりに開き全身から殺気が吹き出している。逆に小次郎の白い顔は、だんだん紅潮して眼は少し細められているが、キラキラと輝く闘志が溢れ出ている。

「時がうつる」

観ている者の、眼には見えぬほどの動きで、やがて二人の足は草を踏みにじり、じりじりと間合がつかまってくる。

陽は雲から離れた。ゆっくりと雲の影が船島の上をかすめ去り、風が草を動かしている。

幔幕の外に出ている長岡佐渡も、有吉内膳も息をのんで立っているきりであった。

この巖流島船島の決闘で佐々木小次郎は武藏に敗れた。時に慶長十七年四月十三日であった。

◎ 天正三年（一五七五）の九月、はじめて大名格（三万三千石）となった前田利家が越前府中へ入った。その家臣景政が使者となって富田勢源の出仕を請うたが勢源は「人間本来無一物」よ。と悟ったような返事をしてこたわった。「浄教寺の山里」（福井市内越美北線一乗谷駅下東南へ約二軒）に隠栖カクレカしていたのである。

中條流勢源の弟子のうち最も年少者にして「後生畏るべし」といわれたのが佐々木小次郎であった。（福井県今立町が出生地）

少年小次郎はよく出来た。その出来る少年に対し、勢源は少しずつ小太

刀を短くしてあしらった。少年も負けてはいない。

勢源に反比例して、得物を少しずつ長くした。勢源の小太刀が三十三糎になるころ少年の大太刀は一米余糎にも及んだ。それでも勝てない。大太刀が勢源の身に届く寸前に勢源の小太刀が首筋を打つ。

ある日、偶然なことから、少年はひとつの技を会得した。それは、まず大太刀を真向うから拝み打つようにつかつかと進み出て、相手の鼻先に打ち込む。すかさず、かがみこんだまま、太刀をかつき上げて打つ。つまり、はじめの拝み打ちはフェイントであり、かつき上げる返し太刀に、一瞬の勝負をかける。

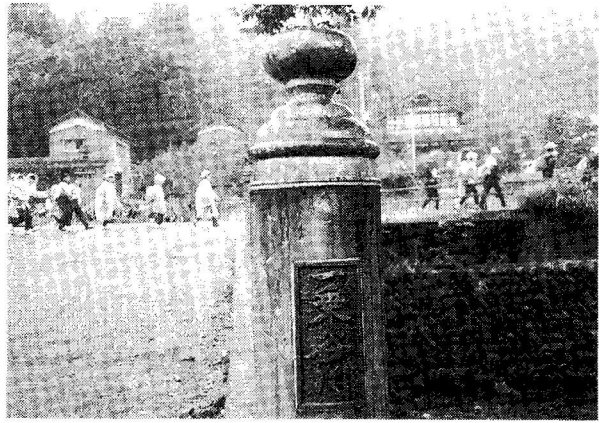
「後世これを『ツツバメ返し』という。」
即ち巖流佐々木小次郎の秘剣秘法の剣術である。

◎ 筆者は小次郎に寄せる深いおもいから、雨の中を一日その修業の地を尋ね歩いた。

福井市内一乗谷の浄教寺町には一乗谷川の上流にかかる高さ十二米、幅二米の、乗滝がある。

滝の傍らにある滝殿跡は、朝倉義景が足利義昭を歓待した所と伝えている。伝説では、佐々木小次郎が『ツツバメ返し』の秘法を修得したのはこの滝であるともいわれている。

富田勢源の死は場所も時期もわかっていない。小次郎が剣を学んだ中條



富田勢源道場に近い一乗谷川（谷奥に滝がある）

流の勢源の道場は近くの春日神社の境内にあったらしくその墓というのが大石でつくられ一乗谷の奥の盛源寺に苔むしてある。

この寺は朝倉館跡から一・五軒ほどさかのぼった西新町にあって天台宗の古刹。供養石塔を始め約七百体の石仏で名高く、市の史跡に指定されているところである。

小次郎橋や、その愛人兎祢の名のついた橋もつくられて観光地になっている。

朝倉氏遺跡資料館を見学した。陳列は手ぎわよく、解説もゆきとどいて

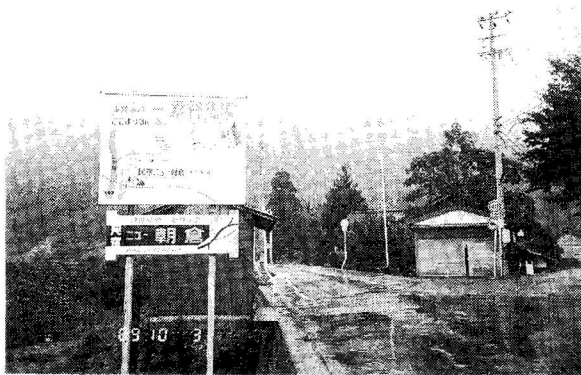
いる。
昭和四十二年から福井県教育委員会が組織的に一乗谷の発掘をおこない、最後の城主、朝倉義景の城下町の構造や遺物をとおして昔の武士達の生活が明らかになった。整然と並んだ十数棟の武家屋敷、湯殿跡がある。また庭園はこじんまりとしているが、借景、構図、立木等々は、白眉であった。

◎ 佐々木小次郎がその秘剣を遣った日、太刀先が僅かに勢源の脛に触れた。その時小太刀を握る拳が小次郎の首筋にも……触れた。

その日からまもなく、道場を出た小次郎は、浄教寺村を離れ、諸国歴遊の武者修業の旅に出るのである。

昔から小次郎の秘術は燕返しと呼ばれている。滝に臨んだ岩頭に立って、飛び廻る燕を斬って秘術を会得したといわれている。

「剣は孤なり」—— 剣豪とは淋しいもので人も寄りつき



朝倉城跡で名高一乗谷（佐々木小次郎修業の地）

難く、つねに荒野を征くがごとく油断もできない。小次郎も強くなればなるほど高慢と猜疑心が増してゆき武藏と同じく狷介孤独。とにかく剣一筋の道であった。

小次郎は、おのれの剣法、それも燕返しつばきがえしの魔剣だけに頼った。武藏は総合力を武芸と考へ、作戦も武芸の重要な要素としていつも戦った。と「二天記」に書かれている。

歴史学者によると、歴史は、洋の東西ともに、あくまで勝者のものであって、敗者はみな黙して語らない。

大衆文学の名手「吉川英治」も武藏に好意的で、小次郎は敵役視されている。また一説によると、二人の年齢差は大きく、出生地も周防岩国の産で童子髪こどもかみのつっぱり族つっぱりぞうのスタイルであった。

郷土史家の一乗山正寛寺いちのやませいけん（福井市鹿俣町）住職佐々木泰信氏は、佐々木小次郎の後裔こういを名乗り、多くの資料を寺内にそろえて研究されている。

世を捨てて山野に隠る。

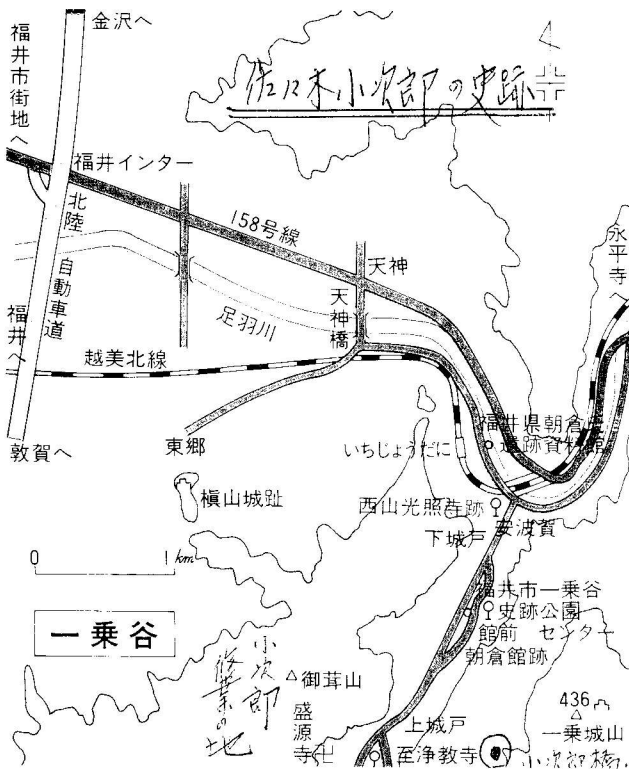
飄然として、その行く処を知らず

その余生、絶えて知る者なし。……と

孤高の剣聖一乃斎伊藤景久は野末の彼方に消え去ったといわれるが、佐々木小次郎は独得の秘剣を創出した名人として、いまでも巖流島に名を残している。

◎ 武藏の里、岡山県大原町と、小次郎の出生地、福井県今立町が三八〇年ぶりに、下関市巖流島で両町友好親善の姉妹縁組の調印式が（一九九〇年九月三十日）行われ、武道大会や諸行事が盛大に行われ両町の若者が、決闘でなく記念植樹を仲良く楽しくとり行い、観光のPRにも役立てたいと頑張っている。

長刀（三尺五寸）
童子髪の佐々木小次郎



人物紹介（各支部より）

〈海部支部〉

平岡 竹雄（七十七歳 剣道教士七段 剣連相談役）

海部支部 中山 啓 男

先生は、大正三年一月阿南市桑野町岡元に生まれ、昭和三年四月富岡中学（現富岡西高校）に入学する。剣道部に入部して武専出の火畑三郎先生から初めて剣道の手ほどきを受ける。三年時に小浜重徳先生によって理詰めの技を教えられ剣道のとりことなり本格的に取り組む。常にレギュラーの座を保ち幾多の試合を経験して実力をつける。昭和九年四月池田師範学校本科二部に進み国文学と歴史を専攻する。古の都、奈良京都を訪ねて自らの目と足でその歴史を確かめられたそうである。一方、剣道においても、鹿児島出身の志賀七段に師事する機会を得て、文武の道を究める。

昭和十一年四月、短期現役兵として大阪第八聯隊に入隊、同年八月陸軍歩兵伍長に任官後除隊する。除隊後市岡市立第一小学校訓導を拝命、三年後の昭和十四年四月、橋国民学校訓導に迎えられ、郷土徳島の教育に参画する。当時の剣道界に目をやれば、かつての後輩が参段に昇段、活躍しているのに発憤、富岡警察署道場に繋ぐ通い練習に励む。戦争たけなわの昭和十九年四月、日和佐国民学校転任にともない縁あって平岡姓となる。

終戦後GHQの勧告により剣道が禁止されていたが、その解除を待たず同志合い図り、秘かに疎開してあった剣道具を集めて修復する。日和佐幼稚園を仮道場としてけい占を始めた。これが海部における戦後剣道のスタートである。現在その幼稚園は、町の産業資料館となり、老朽化しているものの昔のおも影を留め、剣道復活に歓喜した先輩剣士たちの掛け声を聞く思いがする。また、昭和四十五年四月、日和佐小学校長に赴任すると同時に日和佐剣

道スポーツ少年団を創立し、今年で二十周年を迎えた。この間多くの剣士を世に送り、県下各地でも広く活躍している。これも正に先生の剣道への情熱の結晶である。

昭和四十八年三月、小学校長勇退後は、海南高校に剣道師範として二年間出講する。剣連海部支部長となり本郡剣道の活性化に心血を注ぐ。又町教育行政にも参画し、教育委員長を含めて八年間に及ぶ敏腕をふるわれた。同じく本郡同和教育行政でも会長に推され多大の功績を残されている。

このように先生の七十七年間の歴史は限られたスペースでは到底語り尽くせるものではない。それほどに多共に秀でられそれらのすべてが、地域社会で高く評価され貴重な存在なのである。戦国の武將、齋藤道三を思わせる風ぼうは又格別の親しみを覚えるのである。

最近の先生は剣道の指導はもちろんのこと、公民館活動の中で先生の最も得意とする古文書の解説講座を担当され盛会を極めていく。書道も又剣道家にふさわしく健筆である。

剣道を学んで六十二年、教えること五十余年、今もなお、かくしゃくとして本部剣道の先頭に立ち後進の指導に熱く燃える今日この頃である。今年、先生喜寿の年にあたり、われわれ門弟合い集いて祝賀の宴を催し、先生の更なるご長寿をご祈念申し上げる予定である。

〈丹生谷支部〉

吉田 租（教士七段 神職 剣連監事）

丹生谷支部 山脇 隆 志

大正十一年四月三日那賀郡驚敷町大字和食に生まれる。旧制富岡中学校に進学し大畑兼三郎、小浜重徳両先生の指導を受けることとなり氏の剣道人生が始まる。

生来の熱意と持ち前の根性で精武格闘めきめきと上達し、卒業時には早くも初段位を取得、当時の先輩に松本一城、平岡竹雄両先生あり、同期に既に

三制富岡中学校の一時代を直す。

卒業と同時に国学院大学神道部（短期）を経て軍隊に入り、前橋陸軍予備士官学校（第十期）を卒業して陸軍少尉に任官する。

戦後郷里に帰って丹生谷剣道の創生者でもあり、既に本誌にも紹介された剣豪山家雪藏先生の門に入り、竹刀一本入手するのも難しい困窮時代、まして専用の道場などある筈もなく、小学校の校庭や教室を利用して稽古を積む。常に山家先生の影の如くその教えを受け意を体して、地域内の役場、学校、更に地域の剣道愛好家を訪ねて剣道興隆への協力を要請する。

その甲斐あって昭和二十九年には第一回丹生谷剣道大会（阿井小学校）の開催にこぎ着ける。

山家、大沢善二郎両先生の絶大なるお力により丹生谷剣道いよいよ盛んとなる。大沢先生、原貢、両先生を中心に愛好者と計り、丹生谷剣道の核とすべき剣道専用道場の建設を計画し活動を推進、幸い多くの賛同者の協力と浄財を得て、昭和三十二年山家先生邸内に振武館道場を建設し同先生に贈呈するという大事業をなし遂げた。

爾来十年余、振武館を中心に丹生谷剣道は益々隆盛となり、寒稽古、土用稽古は盛況を極め出張審査の会場ともなり、（斯く申す筆者も初、二、三段をこの会場で受験）いやが上にも丹生谷の剣道人口は増加する。時を同じゅうして中学校剣道もいよいよ本格的となり木頭、宮浜、相生、鶯敷、加茂谷、平島の各中学校も前記稽古に続々参加し、合宿所の設営を始め運営万般に尽くした氏の努力はまことに大なるものがあつた。

余談ながら剣豪は酒豪にも通じ、前述校の先生方や遠く徳島、鳴門方面から来館されし講師先生間の懇談の場も多く且つ盛況意義又一入と聞く。

氏は多忙な本業の傍ら地元中学校の剣道講師として、今日迄三十余年後輩の指導をつづけ自らも昭和五十八年五月教士七段位を取得し県下高段者の列に加わる。更に暇を得て那賀高校へも出向き剣道の指導を通じて若者のエネルギーの吸収に努めていられるとも聞く。一方母校富岡西高校OB会牛岐剣友会の年長組として同校各種稽古会にも遠征している由である。

また昭和四十四年頃の一時期と現在も再度県連盟の監事を勤め剣連発展に

寄与貢献して、そのことを巨し添え、益々健勝精武を怠らず広く斯界の為にいよいよのご活躍を祈念して筆を擱くこととする。

〈名西支部〉

野口 直之（勲七等 剣道六段居合道七段）

名西支部 阿部 全 司



野口氏は大正六年六月三日名西郡石井町上浦で公務員吉次郎の四男として生まれた。広永原士の末裔である。剣道は県立麻植中学校で故石井範士に学び、昭和十二年三月四日同校卒業の日、剣道一級を許された。十九歳の時であった。

今日では小学六年の十二歳で一級はザラだが半世紀前では中学生の有段者は稀有の存在であった。軍隊は帯刀乗馬自分の憲兵科だったので軍刀術の訓練に努めた。剣道とは学校関係者での呼称で陸軍は剣術といった。常在戦場の建前から「白兵に習熟し敵を斬突する」のが目的であった。今次大戦では昭和十七年三月中国からはるばる赤道を越えてオランダ領ジャワ島（現インドネシア）に敵前上陸した。占領地軍司令官が剣術を好み推進したので猛暑の中で訓練が続いた。怠惰を戒め志気高揚に努めたので技術の進歩があつた。昭和十九年には軍司令部が審査を実施した。一等二等の内容で聞きなれない名に有段者は戸惑ったが、それぞれ受験した。その結果二等を命ぜられた。四段相当である。武徳会でも教士号を廃し達士と改めるなどいろいろ模索していたようである。

昭和二十年に入ってから剣術道具は不用だった。素面素甲手でのたたき合い剣術で専ら面のみの攻めだったので案外痛くなかった。戦後は戦犯として炎熱の異国で五年間服役した。

憲兵隊特高主任としては仕方がない結果と受けとめているが、あの時期に

五年は無駄な時間だったと述懐する。追放解除後徳島刑務所に勤め剣道復活再生に努力し今日の基礎を作った。六段取得は昭和三十八年で、第十八回国体に出場するなど好調な時期もあったが好事魔多しとか頸骨挫傷の事故で剣道は断念した。

しかし居合があった。居合道の師も石井範士で入門の動機は納刀の妙技に魅せられたからだという。電光石火とは、すばやい動作の事をいうのだが師は紫電一閃刀身はもう鞘の中、正に古今無双の早業でいかほど努力しても師の域には到達できない技の一つである。また能書家でもあった師は剣禅一如とよく書かれた。その意は極めて難解七十三歳の今なお模糊として判りかねている。その指導要領は「わしの後に続いて抜け」で弟子は師のまねをすればよく、これでは師に似ぬ方がおかしい、今にして思えば、後を振り向くことなく一心に示範されるその姿が剣禅一如そのものでなかるうかと思うようになったとしみじみ述懐されている。

現在それなりに身体はいたんでいるが斯道に終わりは無い、正に道幽玄である。石井範士のたった一人の弟子としての義務はその道統を後世に伝え残すことにある。やらねばならぬのである。目下川島高校阿波居合道、名西支部に於て同好の士と研究を続けている。剣道も小規模ながら剣道教室に於て指導して後継者の育成に余念がなく斯道を語る目は輝いている。まだまだ大丈夫と見受けた。

〈板野東支部〉

吉田 静雄 (六十九歳 剣道教士六段)

板野東支部 原 田 進

現在、徳島県剣道連盟板野東支部顧問並びに松茂少年剣道教室顧問として活躍されています。

大正十一年二月板野郡松茂町の農家に生まれ、十三歳から松茂公民学校において剣道を始める。勉学と家業である農業を手伝いながら剣道範士近江佐

久郎先生、河野照雄先生、細川先生らの指導を受け剣道修練に励む。

戦争の勃発により昭和十八年西部三十三部隊越智隊に入隊、満洲へ。終戦によりシベリヤコムソモレスク第一收容所にてソ連の捕虜となる。抑留の二年間は剣道で練磨した強靱な体力と不屈の精神力により寒さと飢え、過酷な重労働に耐えぬき、昭和二十二年九月舞鶴に復員する。

戦後、剣道が復活すると貫心流尾形貫心館道場にて剣道の修業に精進し県下の大会には毎年出場、また四国大会にも愛媛県大会をはじめ三回出場。当時は支部の隆盛時代であり、支部の発展に大きな功績を残した。

また一方では、昭和二十五年松茂剣友会(現在・松茂町体育協会剣道部)創設の発起人として貢献され、剣道を通じて青少年の健全育成のために情熱を注がれました。

この間、昭和四十年から六十年までの二十年間松茂体育協会剣道部長、昭和五十年から昭和五十九年までの十年間徳島県剣道連盟板野東支部長を歴任するかわら松茂町議会議員として、その手腕を発揮するなど、行政面と人間形成の両面にわたってご尽力されました。これらの功績が認められ昭和五十年には松茂町社会福祉協議会より表彰されています。

剣の道は、全身全霊自己のすべてを投入し、いかなる困難にも堪え、まっしぐらに取組もうとする不退転の熱意、吉田先生の人生そのものであると思われまます。

柳生宗矩は「剣の極意は我に克つことにあり」といい、剣道は常に人生修業に通ずるものと考えます。

吉田先生を始めとする諸先生方の築かれた剣道の基盤を我々はますます盛んにし自己の修業はもとより、青少年の健全育成に努力してまいりたいと考えております。

関係者各位のご協力をお願いする次第であります。

新人紹介

〈勝浦支部〉

大久保喜正（三十八歳 五段）

私と大久保喜正先生との剣道の出合いは、確か私が青年団の時であったと思います。先生のお父さんには、私が中学時代に剣道のご指導をいただいたことが念頭に想い浮かびます。

現在、親子二代にわたって私はもとより娘、息子と共にご指導をいただいております。今私の娘と息子は、中学校で剣道に励んでおりますが、少剣時代の時には、一に基本、二に基本という大変基本に忠実なご指導をいただきました。大久保先生の基本に対する教えは、私はもとより他の先生方に好影響をあたえているところであります。

大久保先生は今現在、親子三代にわたって鍛冶屋を営んでおります。年齢は、三十八歳という若さでは有りますが、剣道の練習においては、大変厳しいものが有ります。自分の思ったことは、*「ピシッ」*という反面、人格を尊重し、人を愛し、なおかつ心温かい抱擁力のある方だと思います。人を導く力は誠に、身体全身に漲みなぎっています。私は今四十歳ですが、大久保先生の人柄には本当に感心致すところであります。時間には厳格であり勝浦少年剣道教室の第一人者ともいふべき人物です。今年で、少年剣道教室が発足し、九年の歳月が流れました。その間、大久保先生には仕事を休むことも惜みせず、稽古、ご指導に励んでいただいたお陰だと心から感謝致しております。今までに多くの教え子が、少剣から中学校、高校へと進学しましたが、その中で数名の子供達が最優秀選手獲得の実績を残した人もいます。この事は指導者として、自分自身にとっても誇りに思い又、一生涯剣道を通じて心に残ることでしょう。

これからも、子供達と共になお一層勝浦少年剣道教室が、伸び行きます様ご指導を賜りたいと心からお願ひ致します。

戸村記

〈阿波支部〉

木村 秀正

中学校時代はバレーボールの選手として活躍していたが、高校進学後に剣道を始めた人である。彼を剣道の道に進ませた起因は徳島農業高校に進学したことであった。

それも彼が人一倍運動能力に秀でていたことと同時によりよき指導者に出会ったことであった。当時の徳農には故下村富夫先生が在職されていて、その実力と卓越された指導力により、当時の県高校剣道界では他の高校を押さえて徳農の剣道の全盛期であった。

彼は入学と同時にクラブ活動に剣道を選び三年間先生の厳しい指導を受けた。彼の努力と、運動能力とが幸いして段位を取得して卒業する。卒業後は数年間家業に関係のある仕事を選んでその方面に就職する。その後数年間は専ら仕事に熱中し剣道から離れていたが、その後実家に帰り家業に精励していたが、町に剣道教室が創設されるや指導者として参加、三人の自分の子供達も入室させ、親子で修練に励むこととなった。その努力により心技共に格段の進歩向上が図られその結果毎年の昇段審査にも優秀な成績で合格し、現在五段位を免許されている。

家業の余暇を利用しての修練、その彼の努力には敬服する。現在でも健全な青少年の育成を目指して剣道教室の指導に熱心に取り組んでいる。阿波郡支部としても今後の支部運営面で彼に期待する所は大きい。

〈名西支部〉

平田憲四郎君

寒風の中、オートバイに跨がり馬上よろしく、颯爽と一m八五の偉丈夫を乗せて練習会にやってくる。

名西の侍大将、そんな表現がピッタリの男である。

剣道は、貞光工業からと少し遅い出発だが、恵まれた資質から四国大会に出場、五年位前より、重井先生の右武館に入門剣道を再開され、平成二年度、五段に合格と順調な歩みを続けている。恵まれた体軀を生かされ、大成されることを期待している。

会社では、部長として益々重きをなしている。不惑を迎える痛快な日本男子である。

須見 昌輝君

「剣道は大きな声で、教えられた事を正しく、一生懸命する。医者立場から一言いえば偏食を無くし、規則正しい生活習慣を身につけ、剣道、勉強に頑張ってください。」鏡開きでの先生の御話です。

温和で誠実な人柄を彷彿させる言葉です。先生は、故須見範士の孫娘さんと結婚され、新築病院の院長であり、二人の子供の父（昨年長男に恵まれる）として、また四段合格とまさに順風満帆である。

剣風は、真向からの正剣でその忌憚のない剣は、爽やかな清々しい、りっぱな剣道です。

年はたしか三十三歳、若き名西の剣士です。

〈板野東支部〉

育田みどり（北島南小五年 四級）

私は四年生の時に剣道をはじめました。少し最初は練習がいやだったけど、基本などを教えてもらっているうちにだんだん楽しくなってきました。そして、新しい防具が身に付けられるようになった時はとてもうれしかったです。でも、みんなと練習を始めるようになると、だんだんとおぼえなければならぬことがふえてきて、剣道もむずかしくなってきました。それに試合にでたりすることもあるようになりました。

試合に初めてでた時は、すごく緊張して、不安でいっぱいだったけど、できるだけがんばりたいな。と思っていました。その日は何回戦かで負けてしまったくやしかったけど、今度はがんばろうと思いました。

もう、何回か試合に出て、次の試合の時、私は初めて賞に入って準優勝でした。そのときは自分でもしんどいられないくらい、すごくうれしかったです。これからも、先生の注意や話をよく聞いて、試合にでれるように、また努力してがんばりたいです。

榊井美智子（北島中二年 初段）

今から三年前中学に入学して、剣道を始めました。動機は、あの真っ白なけいこ着とはかま姿にあこがれてやり始めて、果たして最後までやれるかな安でした。というのも私は、スポーツをやったことがなかったからです。ましてや、剣道に全くといっていいほど関心がなくなつた、はかま姿って、かっこいいなあと思ってたくらいだったからです。

最初は、足の運びや素振りから始めましたが、なかなか思う様に出来ませんでした。それで、いやげがさしてきましたが、家に帰ってきて夜寝る前に家の前で練習したせいか何とか、人並みにできるようになりました。中学の部活だけでは物足りなくて、学校の部活が終わって週二回誠武館にお願いし

考えてみるといやだったことが沢山ありました。夏は暑くて面の中がむんむんして気分が悪くなったり、冬は寒くて足にしもやけができて痛くて赤くはれたり、まめができたりといやでした。しかし、その分得ることも沢山ありました。剣道をやることにより、何でもやればできるということを身をもって知ることができました。これからも、剣道を続けて、もっともっと剣道のすばらしいところを見つけていきたいと思えます。

〈三好支部〉

細田 和代 (二十六歳 二段)

中学時代から剣道を始め、辻高等学校剣道部に入部し、鍛練・精神修養・根性といったように厳しい練習の中から精神力を養うことを学んだように思えます。

大学へ進み、剣道と離れてしまいましたが、平成元年三好町の臨時職員として町史編集室に勤務することとなり、再び三好町道場の剣道クラブにて、子供達と夕方二時間の練習に励んでおります。

奥の深い剣道を続けより高い目標に向かって充実した練習をしていきたいと思っております。

大平 静子 (三十九歳 初段 主婦)

昭和六十年、二人の息子を連れて、平田先生指導する山城剣道クラブに入部させていただきました。

私はいつも見学する身でしたが、ある日、平田先生の一言で竹刀を振り始めたのです。それは、竹刀を振ると肩こりが治る。この一言でした。

竹刀を振るのが楽しくなり子供達と一緒に一から習い始め約一年後に防具

を身に付けることができたのです。あの時の嬉しさは、今でも昨日のこのように思い出されます。

剣道することで子供達の気持ちが良く分かるようになり、コミュニケーションももうまくいきます。苦しい剣道練習の中で自分に勝ちたいと思います。私以外に六名のお父さん、お母さん方も汗を流して頑張っております。

私に剣道を始めるきっかけを与えて下さった、平田先生に感謝を忘れず、皆さんと剣道の輪を広げて行きたいと思っております。

〈阿南支部〉

米山 藤男 (三十七歳 二段)

(株)森田機械製作所 富岡事業所 設計課

私が剣道を始めた動機は、長男が阿南少年剣道教室に入って二年目の時でした。同じ教室の父兄からいっしょに剣道をしようと思われたからでした。それから四年が過ぎようとしています。長男は中学一年生、次男は小学校二年生で父子三人で剣道をやっています。

阿南剣道教室の清原先生、有賀先生、その他諸先生方から御指導を受けながら、少年剣道教室の児童といっしょに竹刀を振っています。また家庭では、子供といっしょに竹刀を握って素振りをしていますので、夕食時にはいろいろな話をはずんでしまいます。三十四歳から竹刀を握ったので、最初の頃はよく足を痛めたり思うように体が動かなかったけれども、先生方の温かい御指導のもとに、平成二年二月十八日に二段に合格する事が出来ました。今でも、清原先生からは注意ばかりされていますが、少年剣道教室の子供達といっしょに今後益々努力を重ね、昇段を一つの目標におきながら、子供達と共に長く剣道に親しんでゆきたいと思っています。

〈海部支部〉

溜島 孝志（海南中学校二年）

僕は、いま海南中学校で剣道部のキャプテンをしています。その僕が剣道を始めた理由は、僕が小学校四年の時、僕の家近くに、西山先生によって、西山錬心館が開かれました。僕はそれまで野球もサッカーもしていませんが、親の進めで剣道を始めました。初めのころは楽しみにしていましたが、いざ始めてみると、そうあまくはなく決して思っていたほど楽なものではありませんでした。

僕は、あまり運動は得意な方ではなく、体は大きい方ですが、力は強い方とはいえませんが、これといってとりえはありませんでした。西山先生の道場では、二年半の間、指導を受けましたが、あまり真面目に練習をやっていたので試合には勝てませんでした。そうこうしているうちに中学に進み勉強もいそがしくなり西山剣道場へはいけませんでした。

中学校では、影山先生に指導を受けております。一年間は、あつというまに過ぎ去り、そして三年生が進学されてから、厳しい練習が毎日のように続きました。厳しき苦しさの中にも楽しく指導していただきました。また、二年生の先輩方にも、剣道の礼とか技について色々指導をいただいたことは忘れることのできない事柄であります。

今こうして勝てるようになったのも先生、先輩方のおかげです。厳しい練習のおかげで僕は生まれかわりました。あの時の苦しい練習、心技一体は僕の生涯の思い出となると思います。

僕がキャプテンになってから一人二年生がやめて僕一人になってしまいました。でも一年生と力を合わせてなんとか、半年ちかくやってきました。半年間キャプテンをやってみて、いろんな事柄、たくさんの人に出会いました。面白い人、教えられる人、いろんな人と出会いました。剣道で出会い知り合った剣友達です。これからも剣道を続けて行けばもっともっと数多くの先生方、剣友に出会っていけると思います。その出会いを大切にして、今後も剣道を続けて行きたいと思います。

道場紹介

板野少年剣道クラブ

板野西支部 岡島 茂 雄

毎日曜日の朝、板野町勤労者体育センターの横を通ると少年たちの激しい気合いが聞こえてくる。午前八時から十時迄、約二十名の少年少女が竹刀を握って稽古に専念しているからである。

この道場が発足したのは昭和六十年六月。昭和五十九年に地元の町会議員で剣道家の高橋栄五段が板野町教育委員会を訪れ、他町村に剣道クラブがあるので板野町にも子供が剣道出来る場を作って欲しいと陳情したことに始まる。

昭和六十年春、同じ地元の板野養護学校職員で、岡田良人四段が、高橋氏が教育委員会に陳情したことを知らずに町教育委員会を訪れ、他町村と同じように少年剣道教室を作るよう陳情した。その時初めて高橋氏が同じようなことを陳情したのを知った岡田氏が、高橋氏を訪問し話し合って二人は意気統合。心強い味方を得たと高橋氏は東奔西走して指導者を集め、町教委の毛登山秀幸氏が東西南の小学校三校に呼び掛けて少年少女を集め、約八十名の子供たちが集い稽古をするに至ったが、指導者たちの多忙と卒業生（この道場は小学生のためであるから）の後の補充が充分でないのと（希望者不足）剣道はほかの球技などに比べて地味なため、野球やサッカーなどに行って脱退したりで現在の数は四分の一に減少してはいるが残った子は粒揃いで『お蔭様で審査のたびにほとんど全員合格しています』とは指導に当たっている岡田氏の弁。

七名程いた指導者たちが多忙のため次々と去っていったり長期に休んだりしているなかで高橋、岡田両先生が奮闘しているなかへ、地元の若手、県庁職員駒留勇人氏、高校生の犬伏勇人君（共に二段）が応援に来てくれている。

ので助かっているとのこと。日曜日午前八時から十時までの出来得れば他町村からも指導に来て頂きたいし、地元の剣士にも応援をお願いしたい現状だということである。今指導に当たっている高橋栄、岡田良人、ともに英信流居合道も五段。気はやさしく力持ちといった大らかな武道の精神を常に子供たちに説いているから、道場の子供たちは武道の精神を理解しつつあり、礼儀も正しく、帰りには先生に挨拶して帰るほど成長している。

そんなわけで道場発足以来数年の出来立てはやはやの道場であるが、当業者も一生懸命であるので運営や指導法についても今後よろしく御指導お願いしたい現状である。

徳島の剣道

——各パートからの報告——

第四八回国体への強化（成年男子）

強化部長 米倉 滋

成年男子の強化にあつては、「48国体優勝」を合言葉に昨年4月より本格的に取り組んでおります。その内容は、

一 強化選手の指定

48国体剣道強化選手として50名を指定した。

二 強化指定日における強化練習の実施

毎週土曜日を強化指定日として定め、午後二時より警察学校体育館において強化練習を実施した。

三 アドバイザーコーチの選任及び、講習会の開催

国体アドバイザーコーチとして

範士 八段 佐藤博信

先生を選任、6月と11月の2度にわたり講習会を開催した。

四 48国体先鋒要員強化合宿及び平成2年度国体選手（先鋒）選考会の実施

8月警察学校体育館において11名が参加し、一泊二日の日程で強化合宿を行い、リーグ戦形式による試合及び稽古を実施した。

五 石川県への遠征を実施

平成3年の国体開催県である石川県へ県警を中心としたチームで遠征し、石川県及び富山県の国体選手と試合及び稽古を実施した。

などであります。

本年度は、これらの強化練習に加え、強化選手の見直しをはかると共に、

県外遠征の頻度を増やし、試合練習を重ね実力を養うようにしたいと考えています。

女子部

徳島市立高校教諭 手塚 十三子

今年度のトピックスは何と云っても富岡東高校が四国高校選手権で史上初の四連覇という偉業を成し遂げたことでしょう。インターハイにおいて入賞は逃したものの、その実力と層の厚さは見事というほかありません。

また大学生の活躍にも顕れているとおり、吉岡久美子選手（富岡西高・立命館大）は関西新人大会において堂々優勝、また近藤加奈子選手（富岡東・大阪体大）も上位に進出するなど高校時代だけの剣道にとどまらず、むしろ大輪となっていることからしても両校の剣道の素晴らしさを実感します。

全国的に剣道離れが目立ち、このままではと危惧されている昨今、本県の女子剣道もそのことは否めませんが、現在一、五〇〇名近くの有段者（初段一、〇三四名、二段三三八名、三段九八名、四段以上一三名）が、ただ段位の取得のみを目的とするのではなく自己の修練を心がけ、それぞれに学生、社会人と立場は違っても剣道との両立を目指し精進しています。

開催が刻一刻と迫ってきました東四国国体の成功に向けて女子部も全員参加で臨みたいと思っております。女子剣士の皆さんの今後益々の御活躍をお祈りいたします。

大学

徳島大学剣道部主将 上西 正之

徳島大学剣道は、約五〇名程で活動しております。

活動内容として、日々における早朝稽古や夕稽古、大学の休暇期間を利用して春合宿や夏合宿、年始には寒稽古を行い、中国四国地区における諸試合

本年度は、これらの強化練習に加え、強化選手の見直しをはかると共に

に臨んでおります。

合宿においては、厳しい稽古を通じて部員一丸となり、今までより一層深い絆が生まれ、精神的にも充実してまいりました。

秋に行われる徳島大学剣道部主催の『眉山杯』は、今年で第九回大会を迎え、鳴門教育大学や徳島文理大学、四国女子大学などの徳島地区における他大学の協力もあり、年々、少しずつ大きな大会となつてまいりました。各大学もだんだん力をつけて、徳島地区における水準もあがってきております。

わが徳島大学も中国地区、四国地区における諸大会では、好実績を残しつつあり、初夏に行われるインカレでは団体戦において準優勝をおさめました。

また、諸先生方や先輩方には、諸大会、稽古などでお世話になり誠に感謝しております。先日行われました『西日本医科学生剣道大会』でも、いろいろお世話になり本当にありがとうございます。これからも、徳島地区における学生の御指導の程よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、徳島大学剣道部の前進と発展のため、より一層の努力をして行きたいと思っておりますので、今後ともよろしく願ひします。

高 校

城ノ内高校教諭 西 谷 肇 一

平成二年一月十四日の新人大会で、男子阿南工、女子では富岡東が制した。しかし、総合体育大会では昨年に続き富岡西(男子)、富岡東(女子)が優勝し、全国大会出場の権利を獲得した。

さて、四国大会では、富岡東(女子)が昨年果たした三年連続優勝の記録を延ばして四連覇なるか、注目された。そのプレッシャーをみごとにはねのけて記録を更新した。また、個人戦でも小籾香(富岡東)が第3位と活躍した。

なお、全国大会で女子の活躍が期待されたが、対戦相手に恵まれず、ベスト8の力を持ちながら予選で敗退。また、男子も接戦ではあったが十分力を出しきれず予選落ちであった。

して春合宿や夏合宿、年如くは実稽古を行ない、中国四国地区に於ける諸

来年度は、選手権の状況から見ると女子は富岡東、富岡西、川島、小松島、男子も富岡西、阿南工を軸として8校ぐらゐの混戦になるようだ。

居 合 道

高 橋 憲 司

居合道部が「部」として発足し、新たな活動を始めたことは前号に紹介をしましたが、その一環として新年度を前に会員相互の親睦を兼ねて三月に総会を開催し、前年度の行事、決算報告、新年度の行事計画並びに活動目標振興施策等について意見の交換があり、新年度も概ね前年度の行事を踏襲する決定をいたしました。

県剣連主催の行事として、四月に澤田範士を、十一月に福田範士をそれぞれお迎えして春季及び秋季の講習会を開催し、九月には全剣連主催の講習会に受講生を派遣してそれに基づいての県内での伝達講習会を開催しました。また十月十四日には今年度は東京都で全国大会が開催されて参加をいたしました。審査会は、県内では五月二十七日に級々三段、十一月十一日には級々五段の審査会を実施し、春には五名、秋には二十八名のそれぞれ昇級昇段者がありました。

中央審査会においては、五月四日に平尾勝美先生が難関の八段に昇段をされ、十一月十七日には野口直之先生が七段に合格されています。

部の行事としては、先の総会での決定に基づいて県外の大会に参加する選手の選考を兼ねて、四月二十二日に中央武道館において県下大会を開催しました。また選考された選手の強化と会員の技量向上を目的に、五月十三日に上浦小学校体育館、六月十七日に鴨島一中武道場、九月十五日には石井勤労者体育センターにおいてそれぞれ強化練習会を実施しました。

以上今年度において各行事を開催実施したのですが、講習会特に強化練習会に参加された会員が、一部の熱心な会員に限られていた点を反省するべき点として挙げなくてはならないでしょう。今新規参入会員の低迷と共に今後課題を残しての年度でありました。

第五回徳島県高齢者剣道第一回とくしま

「あい」ランド推進協議会剣道大会

徳島県高齢剣友会 事務局長 西野 四郎

平成二年九月二十四日(月) 徳島中央武道館にて、第五回県下高齢者剣道大会が開催された。

今回の大会は(財)とくしま「あい」ランド推進協議会の「あい」ランドフェスティバルの行事のひとつとして、本年度から高齢者を対象として「スポーツ大会」を開催し、高齢者の健康と生きがいの増進を図る目的で開催していた。大会であり、共催の形で実施することとなりました。

「注」平成三年度からは徳島県高齢剣友会とは別に四月から五月頃の開催となります。

また来る九月二十九日から十月二日にわたり滋賀県で開催される第三回全国福祉祭びわこ大会(通称ねんりんピック)に参加される土佐生涯剣友会(門田理事長以下五名)と東京より全日本高齢剣友会(松島理事長外五名)から交歓練習試合の申し入れを受け、午後から県外チームとの三者リーグ戦を行うことになった。

午前八時開会、形通りの式次第に基づき主催者徳島県高齢剣友会清原 栄大会長と(財)とくしま「あい」ランド推進協議会常務理事大溝嘉猷氏の挨拶があり、来賓祝辞として県剣道連盟堀江会長・全日本高齢剣友会松島理事長よりお言葉をいただきました。なおさきの六月十一日に開催された第12回全国高齢者武道大会で竹原常雄県高齢剣友会々長が本部に盡くされた功績が認められ功労賞を受け本日松島 猛理事長より賞状が手渡されました。

次いで打太刀株木芳夫・仕太刀南 充美の両先生の素晴らしい日本剣道形・張野久晴先生の見応えのある居合道英信流がそれぞれ披露された。

いよいよ試合開始、熱戦の連続迫力十分の試合が随所にもみられた。成績は次の通り。

一 団体戦では阿南支部が堂々の三連覇を成し遂げた。

優勝―阿南支部・準優勝―徳島A支部

三位―丹生谷支部・海部支部

二 個人戦(敬称略)

A組 優勝―西野四郎・準優勝―石井克太郎

三位―勝浦 守・蝦名久作

B組 優勝―株木芳夫・準優勝―高田 豊

三位―乾 寿夫・遠藤一美

C組 優勝―勝沼信彦・準優勝―高下正義

三位―中山啓男・雄西義春

予定通り十二時三十分頃、団体、個人戦共に終わり昼食後県外チームとの三者団体リーグ戦が繰り広げられた。第三回全国福祉祭びわこ大会の前哨戦に相応しい好試合となり、お互いに初顔合わせ、とても高齢者と思えぬ気魄に満ちた白熱戦そのものである。

対戦の結果は、東京・高知・徳島三チームそれぞれ仲睦まじく一勝一敗と引き分けて終わる。

続いて県外から参加の先生方と立合方式での模範試合が、第一コート五組・第二コート五組の計十組が組まれ行われた。

そして、またとない折角の機会なので残り時間約四〇分間、三者合同稽古が展開、思う存分快い汗を流しお互いに親睦を深めた有意義な練習風景で終わりました。

閉会式では団体優勝の阿南チームに全日本高齢剣友会寄贈の優勝旗が阿部三十三主将の手に、「あい」ランド推進協議会杯が大溝常務理事から、それぞれ人賞者に授与され第五回県下高齢者剣道大会兼、第一回とくしま「あい」ランド協議会剣道大会が盛大に且つ成功の裡に滞りなく終わることが出来ました。

以上

四国高校剣道大会 四連覇をはたして

徳島県立富岡東高等学校 三年 小 藪 美 鈴

平成二年六月十六日と十七日の二日間、香川県立丸亀武道館において第二十四回四国高校剣道大会が開催されました。昨年大会史上初の三連覇を果たし、今年はそれに続く四連覇という大きな目標を持って私達は試合に臨みました。

試合は四校一組の予選リーグがあり、それからトーナメントという試合形式でした。予選リーグ一試合日は八幡浜と対戦し、みんな緊張していてもどおりの剣道ができなくて何度もハラハラしましたが結果的には三対〇で勝ちました。初めから苦しい試合だったので次の高松一高との試合では一試合目みたいな試合は絶対にはしないと思いながら試合に臨み、その結果か、緊張も少しはとれ普段の剣道ができ勝つことができました。次の対戦校は一、二年を主体にした明德義塾、この試合は私達三年生の意地にかけても負けられません。それにこの試合の勝者が決勝トーナメントに進めることになっていました。試合はやはり苦戦でしたが、私達は三戦全勝して決勝トーナメントに駒を進めました。

トーナメントでは何度か練習試合をしたことのある高松商業、相手の手の内も分かるかわりに自分達の手の内も相手に分かっているのですやりにくい試合でしたが、三対二で勝ちました。そして決勝の対戦校は準決勝で高松南を破って波に乗っている宇和島東、今まで一度も対戦したことがないのでどういうチームか全く分かりません。私達は試合直前に円陣を組み四連覇という目標が達成できるように頑張ろうと声をかけ合いました。試合は先鋒、次鋒、中堅が勝ちその瞬間、私達の優勝が決まりました。

あの瞬間のことは一生忘れることができないと思います。私達が四連覇と

大きな目標を達成できたのは、第一に「チームワーク」そして「先輩に二指導してくださった先生方や応援し、私達を支えてくださったご父兄、先輩達のおかげだと思います。本当に有難うございました。そしてこれから後輩達には緊張やプレッシャーなどに負けずに頑張ってもらいたいと思います。

第20回全国中学校選抜

剣道大会に出場して

高浦中学校 近藤 正章

八月二十三日に行われる全国大会へ出場するため、僕は、前日から新居浜市へ行き開会式へ参加しました。周りを見渡すと初戦で対戦する去年三位の広島県東城中学校、千葉県勝浦中学校、優勝候補V2を目指す佐賀県神崎中学校など強豪ばかりの顔ぶれの中ぼくらは圧倒されるばかりでした。

あくる日、大会場へ入り入場行進を終わらせた僕は少し練習をし試合に臨みました。さすがに県大会以上に緊張しました。

先鋒の僕は「どうしても勝たなくては」というプレッシャーが、かかっていました。僕はもうドキドキして「試合になるのだろうか？」と不安になるばかりでした。しかし、試合が始まるとがむしゃらです。僕はいろいろとフェイントをかけ相手のバランスが崩れた所へすかさず小手を決めました。それからはずがに一本もとらしてくれなかったけど、なんとか勝ちました。その結果広島を2-0でくりました。しかし、勝浦中学校はとて強く、僕はあせってしまっ一方でした。

結果1-4で負けてしまい惜しくも決勝トーナメントには出場できませんでした。

僕は思いました「やはり全国の壁は厚かった。」しかし僕はベストをつくしたので、悔いはありませんでした。これを踏み台に来年こそは決勝トーナメントに出たいです。

第20回全国中学校選抜

剣道大会に出場して

阿波中学校 酒 卷 裕 美

8月23日激しい雨も小やみになった新居浜市市民センターで開かれた総合開会式。全国の選ばれた男子48校、女子48校が一堂に集まり一枚ずつスポーツライトに照らされながら紹介されました。会場の雰囲気がいよいよ上がっていく中だんだん私たちの番に近づいてきました。その間、この日のために苦しい練習を積み重ねてきた二年半の出来事が頭の中にうかんできました。とにかく日々の練習は同じことをくり返しているのに毎日が新鮮だったこと。試合で自分の力が十分に発揮できなくて悩んだことなどが次々と現れては消えました。

香川県の紹介が終わり、次は徳島県の番になりました。紹介されている間とても緊張しましたが、その時あらためて「私たちは徳島県の代表なのだから県内の中学の分まで一所懸命がんばろう」と思いました。一分程度の間にいろいろなことを考え、紹介が終わってからは、翌日行われる大会のことをずっと考えていました。約二時間の式が終わって、また新しい緊張が生まれま

した。翌日は一時間ほど早く起きて出発しました。試合の前の練習はリラックスしてできたのですが、いざ試合となると会場に入ったとたんすごい熱気で昨日の緊張がまた襲ってきました。いよいよ試合がはじまりました。一試合目は肩に力が入ってしまっってみんな自分の力を十分に発揮できなかったけれど勝つことができました。二試合目には各自がのびのびと試合ができたと思います。吉備中や上郡中が私たちよりも早く負けていたのでどんなに強いところか来ているのだろうかとか心配していましたが、決勝リーグに出ることができて本当によかった。決勝リーグでの一試合目は楠根中学でした。一本差で負けてしまったのが心残りではありません。終わったあとでどうこう言っても仕方ないけれど楠根に負けたのは、中尾先生がいつもおっしゃっている『一人×五人+アルファ』のアルファが少したりなかったのだと思います。

道場へ、一三、一三〇、一三三は野壁道場へそれぞれ朝稽古をお願いした。二菱道場では室井・野正両範士、野間道場では昭和十五年の天覧試合で優勝された館長望月正房範士八段を初め高段者の先生方より直接ご指導を受け地方では見られない所謂関東勢の素晴らしい剣術にも触れることが出来毎年の事ながら、大会も大切だがこのような機会に出来るだけ参加することの姿勢が又必要ではないかと思う次第です。十日午後には第二陣と合流の上翌十一日の大会での健闘をお互いに誓い合った。

大会の成績は総じて振るわず、只一人遠藤・美七段が東京での朝稽古の成果がもの見事に実を結びB組（65歳〜69歳）で準優勝に輝き一応の面目を保つことが出来ました。

尚竹原常雄徳島県高齢剣友会々長には全日本高齢剣友会より会に対し多大な貢献のあった実績が認められ、この度功労賞が贈られました。

この功労賞は八十五歳を迎えられた会員に贈られるもので、会費は免除され終身功労金が贈られることになっております。徳島では阿部国太郎先生に次いで二人目であります。

さて、急速に進む高齢化社会に向かって厚生省では高齢者の自立と交流、参加と創造を基本理念として全国健康福祉祭り、通称「ねんりんピック」が昭和63年に兵庫県で第一回が開かれ平成元年は大分県、二年は滋賀県そして来年度は岩手県で開催のことが既に決定しており老人の国体のようなものでも年々各県持ち廻りで開催される。

このねんりんピックに剣道が弓道と共に競技種目に加えられたのは、全国老人福祉助成会主催のこの全日本高齢者武道大会の存在が高く評価されたのではないかと思う。

高齢剣友の私共にとってこのように剣道大会なり、錬成の場が年と共に拡がりをみせている今日、五〇年も六〇年も竹刀を握って生きて来た者には本当にありがたいことであり、何の屈託もなく健康に生きがいを求め益々剣の道に精進しよう。

以上

第三回全国健康福祉祭 びわこ大会に出場して

高田 豊

第三回全国健康福祉祭びわこ大会（通称「ねんりんピック80びわこ」）剣道交流大会は、新装なった滋賀県野洲町立総合体育館で、平成二年九月三十日〜十月二日の三日間盛大におこなわれました。本県から予選を経て、大将高田豊、副将遠藤一美、中堅株木芳夫、次鋒南充美、先鋒中山啓男、補員森本好美、佐藤勇というメンバーが参加させて頂きました。

ご承知と思いますがこの大会は、とくしまあいランド推進協議会の全面的なお力添えと至れり盡くせりのお世話を頂きまして、スポーツを愛する我々熟年組がその参加を希望しているイベントであります。

今年には通悪く台風と同行する型になりましたが、幸い進路が変わりまして総合開会式は小雨となり予定通り大津市皇子総合公園陸上競技場で常陸宮殿下ご夫妻のご臨席のもと華々しい中に和氣藹々のムードでおこなわれました。本県勢が全員「すだち」の小枝をかざして堂々入場行進をおこなったとき、一際大きい拍手と声援が送られたのが印象的でした。また地元八木先生のご自宅にお招き頂き、そのご警咳に接し大いに感銘をうけましたことは深い思い出として残っております。しかし皮肉にも試合は緒戦に地元滋賀勢との対戦となり敢闘の結果惜敗し二回戦は島根勢と当たり辛勝という戦果に終わりました。

私はこの大会を通じて「同年輩の方々がこんなにも身も心も若々しく全国で頑張っておられる……」という喜びをひしひしと肌と感じ「よし！ 私もまだまだこれからだ！」と強心に期するものが有りました。剣友の皆さん、来年は岩手県です。精進の上奮ってご参加下さい。

第二十五回全日本居合道大会

監督教士八段 平尾勝美

この度東京都は、数年計画で最新の設備と斬新なる外観を誇る広大なる東京武道館を建設しました。第二十五回全日本居合道大会は10月14日この新武道館で華々しく開催されました。

大会要領は例年通りで大きな変化はありませんでした。本県代表選手は五段の部坂本憲一、六段の部吉岡修一、七段の部高橋憲司の三選手が出場しました。

三試合場に分かれて各段トーナメントによる優勝試合が行われ熱戦の続く中、準決勝まで四十四試合が行われた後ここで一旦試合を中断し個人演武が行われ大道場一杯に全国から参加の方々が五、六、七段と段別に日頃の技前を披露し年一回の桧舞台を飾りました。

優勝戦は各試合場で一斉に行われ、満場注目の中に刻々と進行し緊張の続く五分間でしたが、審判の上げる旗とともに本年度の覇者が決まり五段の部高木信之（山口）、六段の部金田和久（東京）、七段の部副島学（東京）がそれぞれ優勝しました。続いて八段以上の個人演武が行われた後表彰式に移り総合成績では東京都が優勝し重量感のある大優勝旗を獲得しました。

本県代表の各選手は立派に健斗致しましたが、紙一重の差で惜敗し残念な思いで一杯でした。「後一步」その重みと難しさを克服することが今後の目標であり、また課題でもあることを痛感致しました。

河野先生を偲ぶ

山田 富康



平成二年九月三日夜河野先生危篤との知らせがありました。しかし夜も遅いし、ご親族の方が集まっているのにかえってお邪魔と思い、翌日お伺いすることにしました。翌日、電話すると「持ちなおした」とのこととで、早速寺西、佐藤、前林先生らと病院へお見舞にかけつけました。

先生は「ヤアヤア」とお元気で容体が悪いなど夢の様で、その日は、「まあ、お見舞に参りますからお元気で」とお別れしました。

しかし、それから二十三日もたつて九月二十六日、朝堀江先生から亡くなられたとお知らせを受け、前林支部長、佐藤先生らと堀江先生宅に集まり葬式の打合せなど式の準備をしました。

翌二十七日午前十時からお葬式のお手伝いに黒崎の河野先生宅に参りました。

式場には県知事外学校関係、御子息やお孫さんの会社関係及び剣道関係の花輪や弔辞が沢山よせられ先生を偲ぶ立派なお葬式でありました。

先生は八十九歳五カ月で亡くなられましたが、戦後昭和二十六年頃から剣道の復興に力を尽くされて堀江先生らを推して剣道発展に寄与されました。

また、大変人徳あり高等学校退職後は教え子の井上建設株式会社社長井上秋夫氏に迎えられるほど亡くなる前まで会社に居られた様でした。

先生は麻植郡鴨島町西麻植の出身で東洋大学卒、在学中範士大島治弁太先生に師事し剣道部主将として活躍、板野郡松茂公民学校、旧制撫養中学校、鳴門高等学校を歴任、多くの子弟を育成され鳴門市撫養町黒崎に住まわっていました。

非常にお酒が強かったが良いお酒で飲むとニコニコと人の愚痴を聞いていた風でした。

徳島新聞社前総務局長川上利春氏や三木俊治徳島市長も教え子の一人でありました。

昔鳴門警察の道場を借りて稽古をしていた時代も折々稽古を見に来ておられたが今でもその温顔が懐かしく思い出されます。

聞く所によりますと遺族の方から剣道連盟に剣道振興の為多額の寄附をされたとのこととです。

私達は先生・ご遺族の志をついで立派な徳島の剣道人を育成することが、先生に対するご恩に報いることであると思ひ、決意を新たにすることがあります。

合掌

剣道範士久保勇先生を偲んで

瀬部 安美



去る平成二年四月八日の深夜に先生は逝去されましたことはすでにご承知のことと思ひます。享年八十二歳であられました。

あけて四月十日に先生のご葬儀がしめやかな中で取り行われ、先生の死を痛み数多くの人々がご参列されました。そして参列者を代表して県議会議員の桑内利男先生、

県剣道連盟会長の堀江幸夫先生が御霊に弔辞を捧げられ、先生は天国へお送りされましたことを改めてここに報告申し上げます。

先生はこのところご気分もすぐれずお体も衰えられる日々と奥様より受け賜っておりましたものの先生の人並みはずれた気力、気迫で全快なされ、またご指導を頂けるものと、久武館の生徒達と共に祈りしておりましたが、このように早く突然に先生とお別れしなければならぬとうとは夢々思ひもかけず、驚きと悲しみ、淋しきは筆舌に尽くせないものがありました。

顧みれば先生は柳生神影流の宗家の嫡子として、二十歳をすぎられてより

剣の道を志され専門家としての道を歩んでこられました。先生の天性の素質もさることながらなみはずれた努力もなされたことと思います。そして数多くの名剣士を育て上げられ、世に送り出されました。その中でも今は亡きご子息の孝志さんは県内外に、その剣名が広く知られております。このことは先生が如何にすぐれた剣道家であり指導者であるかを物語っております。また先生は農業を営んでおられました。石井町きつての篤農家としても広く世に知られていることも忘れてはならない点です。

あの深い悲しみからはや一年近くとなり、先生を偲んでみれば、数々の想い出が甦ってきます。

私が先生に初めて剣の道をご指導して頂いたのは、今から二十年あまり前のことになりました。

当時先生は鴨商、石井中、高浦中の剣道部の師範として生徒の指導に当たっておられました。私は石井中でのことでした。防具を付けられた先生は体も大柄な方で、面ごしに見える大きな目は鋭い眼差しで、恐ろしさを感じたほどでした。しかしひとたび面を取られた先生は一変して笑みを浮かべられたお顔には何んともいえない愛嬌がおりになり、私達生徒の「よきお祖父さん」といった一面をも感じさせて頂きました。先生に稽古をつけて頂くときの先生のかけ声は「オッター」、面を打つと一面テッペンじゃ」と面をきめられていたように思います。

先生は私達生徒の実力に応じて同じくらい、もしくは少々上のところで稽古をつけて頂いていたように思います。それは生徒達の力をより引き出させるためのものであったでしょう。無知な私達は「今日こそは先生から一本を取ろう」と思い先生にかかっていったものでした。

先生に稽古をつけて頂くのは厳しく苦しくもありましたが、反面楽しく面白くもあつたように思います。

中学を卒業して以来ずっと先生には御無沙汰しておりましたが、五年ほど前に突然先生から連絡があり、お聞きすれば最近では少年の剣道が盛んとなり、ご自宅の久武館にも小学生が稽古に来ているとのことでした。しかし先生は一年ほど前の夏の暑さ、また過労がもとで病を患われ、久武館の生徒をみる事が出来なくなられ「瀬部君、久武館へ来てくれんか」とのことでした。

だが、私は人に剣道を教えるほどの力もなければ稽古も積んでおらず、また自家営業で余裕もなくお断りしたのですが先生のお心にまけ、久武館の道場で生徒達と共に稽古をするようになり現在に至っております。

先生には生徒達との稽古をみて頂きご指導願っております。先生がよく言っておられた事に、小学生の間は試合で勝つことも大事じゃが正しい握り、正しい構え、正しい打ちが大事じゃ」と基本に忠実な剣道ということでした。

今後に於きましても今は亡き先生のお姿、お心、また訓えを心に深くききみいつまでも受け継いでゆかねばならないと思っております。

なお久武館は創設以来八十有余年の歴史と伝統のある誉れ高き道場なので、石井中学時代の佐藤修一先輩と共に二人の体の続くかぎりお護りさせていただきます。

最後に先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

松本一城先生を偲んで

西谷肇

徳島県剣道連盟顧問 剣道範士 七段（故人）

先生は、大正五年六月一日阿南市津の峰町新浜に生まれ、旧制富岡中学校に進まれ初めて剣道を学ばれました。その天賦の才はたちまち頭角をあらわし日夜の研鑽は、やがて旧制中学生の第一人者となり昭和九年第三十四回卒業生として同校を巣立ち、当時全日本青年剣士のあこがれであった京都武道専門学校へ入学されました。

いよいよ武道家としての道を歩まれ京都武専で血の出るような稽古の日々と、その合間に京の街で放歌高吟して浩然の気を養った青春の日々の楽しうなお話が今も耳に聞こえるようであります。

武専卒業後千葉県立銚子商業学校教諭として赴任され、若き先生の情熱は今も多くの教え子がお慕いしていると聞いています。やがて、陸軍に入隊され戦前の昭和では最も名誉とされた近衛兵となり、近衛歩兵第三連隊に勤務

みることが出来なくなれば瀬部君、久武館へ来てくれんか」とのことでした。

昭和二十九年五月剣道教士の称号を、昭和三十二年五月七段を授与された先生の選手としての足跡もすばらしいものがございました。

都道府県剣道大会に十三回、東西対抗剣道大会に五回、国民体育大会に数回、四国四県剣道大会に十二回、教職員剣道大会に五回と、徳島県を代表して出場されそれぞれ素晴らしい成績を取られました。その他県内大会には数え切れません。四十年の長きに亘り徳島県剣道連盟役員とし審議員とし重鎮として剣道の発展と興隆に先頭に立って尽くされた御功績は筆舌に尽くされるものでは有りません。先生の生前の御功績はもちろん故人になられても、先生の教えは教え子達によって永遠に受け継がれていくことでしょう。

昭和二十九年五月剣道教士の称号を、昭和三十二年五月七段を授与された先生の選手としての足跡もすばらしいものがございました。

都道府県剣道大会に十三回、東西対抗剣道大会に五回、国民体育大会に数回、四国四県剣道大会に十二回、教職員剣道大会に五回と、徳島県を代表して出場されそれぞれ素晴らしい成績を取られました。その他県内大会には数え切れません。四十年の長きに亘り徳島県剣道連盟役員とし審議員とし重鎮として剣道の発展と興隆に先頭に立って尽くされた御功績は筆舌に尽くされるものでは有りません。先生の生前の御功績はもちろん故人になられても、先生の教えは教え子達によって永遠に受け継がれていくことでしょう。

恩師 森口求先生を偲んで

西岡 侃



剣道教士五段森口求先生は、大正七年那賀川の上流、那賀郡平谷村（現在の土那賀町）でお生まれになられ、少年時代から誠実にして意志強固であられました。

特に、小学生の頃から剣道を学び、大変稽古熱心で、現在、徳島県剣道連盟顧問の中川虎雄先生と共に、遠く海部郡まで練習に通われたのであります。また、徳島県剣道連盟副会長の大澤孝彰先生とも昵懇であられ、那賀奥には先生の剣友の方々が大大勢おいでであると聞き及んでおります。

昭和十六年に現役軍人として旧満洲国（現在の中国）に入隊され、昭和二十年大東亜戦争が終戦なるまで、寒暖殊のほか厳しい満洲大陸で祖国日本の将来のため、生命を賭してその使命を果たされたのであります。終戦後、生まれ故郷に無事ご帰還されましたが、その後、那賀川の治水調節のため、長安口ダムの建設工事が進められることになり、先生宅もダム水没の対象となりましたので、昭和二十八年五月八日土大野町の現在宅に転居されたのであります。

転居後、大野農業協同組合に長く勤務され本町の農業振興と農協発展に尽力される傍ら、剣道の修業を忘れることなく修練を積まれました。

一方、範士七段清原栄先生並びに教士七段遠藤一美先生と共に大野武道同志会の復興発展と青少年の健全育成のため、献身的なご指導とご尽力を頂いたのであります。

先生は、昭和二十八年に五段を、また昭和五十一年には教士を取得され、自らの剣を磨き道を極められ共々に、子弟の育成指導にも全力を注がれ、現在、徳島県剣道連盟阿南支部長教士六段有賀秀敏先生をはじめ、阿南支部の活発な活動の中堅となられている方々や数多くの剣士を育てられました。

また、研究熱心で努力家の森口先生は、先般、開催されました「県民スポーツ祭」の異種試合に出場し銃剣道と対戦されましたが、その時、軍隊で研究と練習を重ね習得されました「技」をご披露されたのであります。

その「技」と云うのは、小刀と脇差の二刀を使い相手を倒す剣法で、先ず、小刀で相手方の銃剣を押さえて攻め入り、一方の脇差で相手を突き刺すという、まさに宮本武蔵二刀流の現代版であり、数多の観衆から大きな拍手と喝采をうけ、広く県下にその名声を挙げられました。

また、先生は他の郡市等へ試合に行かれる時はいつも真心のこもった奥様の手作りの「にぎり飯弁当」を持参され、同志の皆さんにお分けしておられました。大野小学校剣道部「六年生を送る会」のお別れパーティーの時には、奥様手作りの「特別製五目寿し」を教え子達にご準備される等、日頃の練習では礼儀や技等について厳しいご指導をされる先生ですが、ほんとうに心のやさしい温かい恩師でありました。

一方、氣立てのやさしい氣配りの細やかな奥様の内助も忘れてはならないと思います。この師にしてこの奥様あり、実にほのぼのとした暖かいご円満なご夫婦であり私たちの鏡でございました。

京都で行われる六段受験のとき、先生は前日から京都に行かれ、武徳殿で行われた範士九段の先生方の試合を見学され、各先生方がご高齢にもかかわらず氣魄豪剣な試合ぶりに感嘆され、私たち教え子に対し、「さすが、高段者じゃ見習うところが沢山あるわ、わしを含めお前達もまだまだ修業しないと若い者に恥ずかしい。」と言われ、剣の道の奥の深さをしみじみと感じておられました。

その後、六段を取得するため懸命に錬成されていましたが、昨年八月急病により行年七十歳で突然ご他界されました。惜しみても余りあり誠に痛恨の極みでございます。

告別式には、徳島県剣道連盟会長範士八段堀江幸夫先生をはじめ、県下各地から数多くの先生方や教え子達が参列し、お別れを惜しまれました。また、剣道に全く関係のない農家の人々も大勢参列され「森口先生は、ほんとうに心の正しい温かい人だったなあ」とすべての人々から尊敬され惜しまれていました。今更ながら先生の人徳が偲ばれます。

今後二十一世紀に向けより一層明るい豊かな社会を築く上にもまた、剣道界の発展のためにも、是非なくてはならない先生でございました。森口先生のご指導を頂いた私たち剣士は誠に幸せものであり、私たちは、これからも剣の理法の修練による人間形成の道を忍耐強く正しく押し進め剣道界の発展と健康で明るい地域社会建設のため、同志が力を合せ貢献することが亡き森口先生のご恩にお報いできる道であると信じ、今後もより一層修練することをお誓い申し上げ次第であります。

森口先生のご偉徳を偲びその一端を記し、子弟一同心から先生のご冥福をお祈り申し上げ次第であります。

平成三年

ました。今更ながら先生の人徳が偲ばれます。

平成二年度 中学生優秀選手

剣道振興功労者表彰

〔男 子〕

中山真治、喜多 弘(木頭中)、鳥羽昭三、戸村博史(高浦中)、松村 要、板東俊也(市場中)、原田陽博、元木啓之(文理中)、有松慎也、弘田 誠(南部中)、佐藤 博、塩田 朋、伊月修士(阿波中)、福住成樹(那賀川中)、川添義仁(小松島中)、渡辺浩志、松村芳紀(入田中)、兼西良和(驚敷中)、福井和明(相生中)、富田典博(阿南中)、笠井大輔(穴吹中)、石田裕貴(八万中)、天羽将文(阿南一中)、池村哲雄(山川中)

〔女 子〕

前浦志津代、大城夏子、松本智代(木頭中)、酒巻裕美、横川美香、瀬川道子、武沢輝美、篠原美紀(阿波中)、森ひろみ(小松島中)、笠松寛子(入田中)、楠 幸代(市場中)、三島奈穂美、原 幸恵(穴吹中)、白川由美(上板中)、今井多栄子(北島中)、佐野由佳(北井上中)、大谷麻美(南部中)

平成二年度

早川 一也
有賀 秀敏
佐藤 勇
中尾 誠
石井 一郎

平成三年度

笠井 恵之
國金 唯義
西岡 侃
三木 高雄
加林 恵裕
河野 曜雄
近藤 亘

平成二年度 戦いの跡

〔県内〕

◆第15回会長杯争奪高校剣道大会

(4月15日(日)徳農体)

〔男子〕

▽準決勝

川 島 2 - 1 那 賀

富 岡 東 3 - 1 小 松 島

▽3位決定戦

小 松 島 2 - 1 那 賀

▽決勝

富 岡 東 2 - 1 川 島

○西 沢 コー 北川忠

○勝 浦 コドー 榎原

田 中 ー メ 中川○

橋 本 引き分け 坂 本

日 野 メ引き分けメ 北川剛

〔女子〕

▽準決勝

富 岡 東 5 - 0 脇 町

川 島 3 - 1 富 岡 西

▽3位決定戦

富 岡 西 4 - 0 脇 町

▽決勝

富 岡 東 3 - 2 川 島

浜 田 ー メ 福 原○

小 藪 千 メ ー メコ 岩 本○

○小 藪 香 メコ ー 秋 山

○中 村 コー ー 坂 東

○小 藪 コー ー 池 村

◆第15回山家旗争奪県下剣道大会

(4月22日(日)驚敷町民体)

〔中学校〕

▽準決勝

木 頭 中 4 - 1 阿 南 中

阿 波 中 3 - 1 那 賀 川 中

▽決勝

木 頭 中 1 - 1 阿 波 中

(本数勝ち)

〔高校男子〕

▽決勝トーナメント 1回戦 那賀A 3 - 0 小松島、2回戦 富岡西

5 - 1 那賀A、富岡東 3 - 0 阿南工

▽決勝

富 岡 西 1 - 1 富 岡 東

(代表戦)

〔高校女子〕

▽1回戦 Aゾーン 川島 2 - 1 富岡西、川島 4 - 0 海南、川島 2 - 0 城ノ内、城ノ内 3 - 0 富岡西、城ノ内 5 - 0 海南、Bゾーン 富岡東 4 - 0 小松島、富岡東 5 - 0 徳島市立、小松島 4 - 2 徳島市立

▽決勝

富 岡 東 3 - 0 川 島

▽五人以上勝ち抜き ○八人勝ち抜き 那賀高・谷沢真樹 ○六人勝ち抜き 富岡西・大和泰宏、川島高・中川昇 ○五人勝ち抜き 徳島市立・豊沢英作、城ノ内・山室雅幹、小松島・登健司、富岡東・西沢知也・勝瀬剛・小藪美鈴

小松島 4 - 2 徳島市立

▽決勝

富 岡 東 3 - 0 川 島

▽五人以上勝ち抜き ○八人勝ち抜き 那賀高・谷沢真樹 ○六人勝ち抜き 富岡西・大和泰宏、川島高・中川昇 ○五人勝ち抜き 徳島市立・豊沢英作、城ノ内・山室雅幹、小松島・登健司、富岡東・西沢知也・勝瀬剛・小藪美鈴

▽準々決勝 富岡東 4 - 0 徳島市立、富岡西 2 - 0 小松島、那賀 3 - 1 川島

〔男子団体〕

▽準々決勝 富岡東 4 - 0 徳島市立、富岡西 2 - 0 小松島、那賀 3 - 1 川島

〔女子団体〕

▽準々決勝 富岡東 5 - 0 海南、徳島市立 3 - 2 脇町、富岡西 5 - 0 鳴門、川島 5 - 0 城北、富岡東、富岡西、徳島市立、川島が決勝リーグへ。

〔男子個人〕

▽決勝リーグ 富岡西 5 - 0 那賀、富岡西 2 (引分け) 2 阿南工、富岡西 2 - 1 富岡東、富岡東 5 - 0 那賀、富岡東 3 - 1 阿南工、阿南工 3 - 1 那賀

〔女子個人〕

▽決勝リーグ 富岡東 5 - 0 徳島市立、富岡東 3 - 1 富岡西、富岡東 4 - 1 川島、川島 4 - 1 徳島市立、川島 3 - 1 富岡西、富岡西 3 - 2 徳島

▽準々決勝 富岡東 4 - 0 徳島市立、富岡西 2 - 0 小松島、那賀 3 - 1 川島

第2日目 (6月2~4日徳農)

〔男子団体〕

▽準々決勝 富岡東 4 - 0 徳島市立、富岡西 2 - 0 小松島、那賀 3 - 1 川島

第2日目 (6月2~4日徳農)

▽準々決勝 富岡東 4 - 0 徳島市立、富岡西 2 - 0 小松島、那賀 3 - 1 川島

▽準々決勝 富岡東 4 - 0 徳島市立、富岡西 2 - 0 小松島、那賀 3 - 1 川島

▽準々決勝 富岡東 4 - 0 徳島市立、富岡西 2 - 0 小松島、那賀 3 - 1 川島

吉田昌 メコー 佐賀

(県警) (県警)

平野 コーメ 佐々木

(県警) (丹生谷)

平尾 コー 中山

(県警) (阿南)

▽準決勝

青木 コー 吉田昌

平野 メドー 平尾

▽決勝

平野 コー 青木

◆第44回徳島県中学校総合体育大会

(7月22日(日)海洋センター)

【男子団体】

▽準決勝

市場 2-2 那賀川

(代表戦)

高浦 3-2 文理

▽決勝

高浦 (3)2-2(2) 市場

近藤 * 瀬野

高浜 | | 近藤○

片岡 | | 坂本○

○鳥羽 | | 松村

○平村 | | 板東

【男子個人1年】

▽3位決定戦

富田 メメー

(阿南二)

▽決勝

太田 メコー

(坂野)

【男子個人2年】

▽3位決定戦

近藤 ドメー

(高浦)

▽決勝

瀬野 ドメー

(市場)

【男子個人3年】

▽3位決定戦

川添 コメー 渡辺

(小松島)

▽決勝

原田 コメー 福住

(文理)

【女子団体】

▽準決勝

阿波 3-2 上板

木頭 3-2 穴吹

▽決勝

阿波 (7)3-2(4) 木頭

○猪尾 | | 前浦幸

○横川 メメー 中田

篠原 | | 大城夏○

○武澤 メメー 大城照

酒巻 メー コメ 前浦志○

【女子個人】

▽3位決定戦

酒巻 メー 森

(阿波)

▽決勝

猪尾 下 | 前浦志

(阿波)

◆第28回四国中学校総合体育大会剣道競技

(8月5日(日)小松島市体育館)

【男子団体】

▽学校対抗予選リーグA ①東中

(愛媛) 2勝1敗 ②市場中(徳島)

1勝1敗1分 ③仲南中(香川) 1

勝1敗1分 ④高知学芸(高知) 0

勝1敗1分

▽学校対抗予選リーグB ①山田中

(香川) 2勝1敗 ②高知中(高知)

2勝1分 ③高浦中(徳島) 1敗2

分 ④久万中(愛媛) 2敗1分

▽決勝トーナメント準決勝

東中 (3)3-1(2) 山田中

仲南中 (2)2-1(1) 高知中

▽決勝

東中 (2)2-2(2) 仲南中

(代表戦)

【男子個人】

▽準決勝

松本 メー 原田

(香川)

藤沢 メー 中山

(香川)

▽決勝

松本 メー 藤沢

【女子団体】

▽学校対抗予選リーグA ①木頭中

(徳島) 3勝 ②鏡野中(高知) 2

勝1敗 ③紫雲中(香川) 1勝2敗

④愛宕中(愛媛) 3敗

▽学校対抗予選リーグB ①大方中

(高知) 2勝1分 ②阿波中(徳島)

2勝1敗 ③大川中(香川) 1勝2

敗 ④久万中(愛媛) 2敗1分

▽決勝トーナメント準決勝

阿波中 (6)3-1(3) 木頭中

大方中 (7)4-0(1) 鏡野中

▽決勝

大方中 (4)2-2(3) 阿波中

【女子個人】

▽準決勝

大城夏 ー 宮地 (高知)

(徳島) 猪尾メメ ー 洲本 (香川)

(徳島) 徳島 ー 香川

▽決勝

猪尾反 ー 大城

◆第21回徳島県少年剣道練成大会 (8月12日(日)鳴武)

▽4回戦 小松島3 ー 2蔵本、大野

3 ー 1木頭錬、那賀川2 ー 1延野、

阿南少3 ー 1坂野少

▽準決勝

小松島 3 ー 2 大野

阿南 2 ー 0 那賀川

▽決勝

阿南 2 ー 1 小松島

【個人の部】

優勝 豊川 貴司(新開)

準優勝 津山 耕治(大野)

三位 岡沢 大輝(阿南)

林 賢作(阿南)

◆管区矯正職員武道選手権大会 (9月4日(火)徳島刑務所)

①桑原慶二(松山刑) ②森 直行

(徳島刑) ③本山章裕(高知刑)

◆第15回徳島県剣道段別選手権大会 (8月26日(日)鳴武)

【男子初段】

▽3位決定戦 山本メメ ー 橋本

(城ノ内高校) (富岡東高校)

▽決勝 早川メメ ー 小出

(小松島高校) (新野高校)

【男子二段】

▽3位決定戦 中田コメ ー 高貝

(阿南工業) (鳴門工業)

▽決勝 住吉コメ ー 住友

(城南高校) (城東高校)

【男子三段】

▽3位決定戦 奥村メコ ー 細川

(徳大医) (刑務所支部)

▽決勝 佐野コメ ー 馬見

(阿南支部) (阿南支部)

【男子四段】

▽3位決定戦 佐藤コメ ー 小森

(海部支部) (麻植支部)

▽決勝 吉田茂メメ ー 小坂

(県警) (県警)

【男子五段】

▽3位決定戦 四宮メ ー 高下

(県警) (名西支部)

▽決勝 佐賀メ ー 吉田博

(県警) (県警)

【男子六段】

▽3位決定戦 中山メ ー 本田

(阿南支部) (小松島支部)

▽決勝 白木メ ー 吉田昌

(名西支部) (県警)

【女子二段】

▽3位決定戦 谷本(不戦勝)

(小松島高校)

▽決勝 小筱香コ ー 吉岡

(富岡東高校) (富岡西高校)

【女子三段以上】

▽3位決定戦 米倉メコ ー 松田

(阿波支部) (名西支部)

▽決勝 竹内コ ー 島野

(鳴門支部) (名西支部)

◆第5回徳島県高齢者剣道大会並びに第1回とくしまあいランド推進協議会剣道大会 (9月24日(月)中央武)

▽準決勝 徳島A 3 ー 1丹生谷

阿南 2 ー 2海部

(本数勝ち)

▽決勝 阿南 2 ー 2徳島A

(本数勝ち)

【個人】

▽A組(70歳以上) ①西野四郎

(徳島) ②石井克太郎(徳島) ③勝

浦守(徳島)、一村喜佐男(阿波)

▽B組(65~69歳) ①株木芳夫

(阿南) ②高田 豊(板野) ③遠藤

一美(阿南)、乾 寿夫(麻植)

▽C組(60~64歳) ①勝沼信彦

(徳島) ②高下正義(名西) ③中山

啓男(海部)、雄西義春(丹生谷)

▽第3回全国健康福祉祭びわこ大会

剣道親善交流試合

高 知(6)3 4(9) 徳 島

○寺 田 メ メ 1 中 山

時 光 1 メ コ 佐 藤 ○

○大 石 コ メ 1 南

野 島 1 コ コ 株 木 ○

岩 河 1 コ ド 遠 藤 ○

○西 内 コ メ 1 森 本

森 本 1 コ コ 高 田 ○

▽高知県対徳島県国体交流試合

高 知(4)2 2(4) 徳 島

○寺 田 コ 1 勝 沼

○大 石 コ コ 1 高 下

野 島 * 1 浜 田

岩 河 1 メ 寺 西 ○

門 田 メ 1 メ 吉 田 ○

◆第19回徳島県社会人剣道大会

(10月7日(日)鳴武)

▽決勝トーナメント1回戦 小松島

航空隊3-2 錬心館B、阿波3-2

美馬東、岫雲館2(本数勝) 2 錬心

館A ▽同2回戦 徳大医龍2(本

数勝) 2 小松島航空隊、阿波3-2

鳴門、徳大医虎2(本数勝) 2 小松

島B、岫雲館3-1 木頭

▽準決勝

阿 波 2-1 徳大医龍

岫 雲 館 3-1 徳大医虎

▽決勝

岫 雲 館 3-2 阿 波

◆第35回県下剣道大会

(11月11日阿南工業)

【小学生の部】

▽準決勝

竜 虎 館 2-1 小松島少

大 野 小 4-0 津 ノ 峰

▽3位決定戦

小松島少 3-0 津 ノ 峰

▽決勝

大 野 小 2-1 竜 虎 館

【中学校男子の部】

▽準決勝

市 場 中 3-1 那 賀 川 中

鳴門第一中 3-0 木 頭 中

▽3位決定戦

那 賀 川 中 2-1 木 頭 中

▽決勝

市 場 中(4)2-2(3)鳴門第一中

【中学校女子の部】

▽準決勝

阿 波 中 3-2 市 場 中

那 賀 川 中 2-2 木 頭 中

(本数勝ち)

▽3位決定戦

木 頭 中 3-1 市 場 中

▽決勝

那 賀 川 中 3-2 阿 波 中

【高校男子の部】

▽準決勝

阿南工A 4-1 脇 町

富 岡 西 3-1 川 島

▽3位決定戦

川 島 4-0 脇 町

▽決勝

阿南工A 2-1 富 岡 西

【高校女子の部】

▽準決勝

富 岡 西 2-1 小 松 島

川 島 2-1 富 岡 東

▽3位決定戦

富 岡 東 4-1 小 松 島

▽決勝

富 岡 西 3-0 川 島

【一般の部】

▽準決勝

阿南支部A 4-0 驚 敷 体 協

小松島讀志会2-1 阿南支部B

▽3位決定戦

阿南支部B 3-0 驚 敷 体 協

▽決勝

小松島讀志会(2)1-1(2)阿南支部A

(代表戦)

◆第8回徳島県スポーツ少年団剣道大会兼第13回全国スポーツ少年団兼交流大会予選会

(12月16日(日)鳴武)

【女子】

▽小学校4年~6年 ①平尾沙海

(阿南) ②鈴木加奈子(北島) ③西

崎光江(坂野)、左官眞理(北島)

▽中学校 ①敷田美紀(那賀川) ②

陶木りえ(那賀川) ③妹尾かずみ

(市場)、河野久美子(宅宮)

【男子】

▽小学校4年 ①大上達也(阿南)

②尾崎文博(大野城山) ③蛭原正基

(阿南)、本田英秋(桐生日野谷)

▽小学校5年 ①森口雅人(延野)

▽小学校5年 ①森口雅人(延野)

②三村通明(電虎館) ③中尾憲司

(小松島)、林 賢作(阿南)

▽小学校6年 ①湯浅朋宏②坪井光

弘(阿南)③三木琢司(小松島)、

里見洋幸(宅宮)

▽中学校1年~3年 ①弘田 幹

(小松島)②高浜慎也(高浦)③梶

信介(北島)、吉田大和(山川)

▽高校1年~3年 ①鳴滝朝希(和田島)

②近藤一志(市場)

◆第35回徳島高等学校剣道新人大会

(平成3年1月15日(日)徳農)

【男子】

▽準決勝

阿南工 2 | 1 富岡東

富岡西 3 | 0 小松島

▽3位決定戦

富岡東 3 | 2 小松島

▽決勝

富岡西 3 | 2 阿南工

藤田 1 | 2 西岡

○金田 1 | 2 大城

(京岡)メメ | コ 中田

鳴滝メ | メメ 中山

二野ニメ | 杉本

【女子】

▽準決勝

小松島 2 | 1 富岡西

富岡東 3 | 0 川島

▽3位決定戦

富岡西 3 | 2 川島

▽決勝

富岡東 4 | 0 小松島

○山崎メ | 谷本

○阿部メ | 岡本

○小籾メ | 大山

○小籾メ | 藤田

【県外】

◆第38回全日本都道府県対抗剣道優勝大会

(5月3日(祝)京都市立体育館)

▽予選リーグ(徳島リーグ落ち)

徳島 (4)2 | 2 (4)鳥取

○白木コメ | 佐々木

○白木 | 山中

○平野メ | 谷村

久保 | 湯村

坂下 | 岸田

徳島 (1)0 | 3 (6)兵庫

白木 | 阿部

白木 | 長納

平野 | 浦

久保 | 西寅

坂下 | 真砂

◆管内施設対抗武道大会

(5月11日高知刑務所)

▽優勝 高知刑務所

▽準優勝 松山刑務所

▽3位 徳島刑務所

▽4位 高松刑務所

▽敢闘賞 長瀬範彦

◆第42回四国四県剣道大会

(5月27日(日)愛媛県武道館)

▽順位 ①香川3勝 ②愛媛2勝1敗

③高知1勝2敗 ④徳島3敗

◆平成2年度四国高校剣道選手権大会

(6月16・17日丸亀市)

▽予選リーグA組 ①尺誠2勝1分

②高知学芸2勝1分 ③宇和島東

1勝2敗 ④那賀3敗(1・2位は勝者数)

▽予選リーグB組 ①新田2勝1敗

②富岡西2勝1敗 ③高松南1勝

2敗 ④明徳義塾1勝2敗(勝者、本数による)

▽予選リーグC組 ①琴平2勝1敗

②松山北2勝1敗 ③富岡東2勝

1敗 ④中村3敗(1~3位は本数による)

▽予選リーグD組 ①高知3勝 ②

高松北2勝1敗 ③阿南1勝2敗

④松山東3敗(徳島県予選リーグ落ち)

【女子団体】

▽予選リーグA組 ①高松南3勝

②岡豊2勝1敗 ③済美1勝2敗

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

④徳島市立3敗

▽予選リーグB組 ①富岡東3勝

②明德義塾2勝1敗 ③高松一1勝

2敗 ④八幡浜3敗

▽予選リーグC組 ①宇和島東3勝

②高知商2勝1敗 ③香川中央1

勝2敗 ④川島3敗

▽予選リーグD組 ①高松南3勝

②松山西2勝1敗 ③富岡西1勝2

敗 ④安芸3敗

▽準決勝

富岡東 3 | 2 高松商

宇和島東 3 | 2 高松南

▽決勝

富岡東 4 | 1 宇和島東

○浜田メコ | 宇都宮

○小篠千コメ | 森

○小篠香メコ | 大西

中村 | 福鹿

○小篠美メコ | 川西

富岡東は4年連続4度目

◆国民体育大会第11回四国ブロック大会

(7月22日(日)高知県)

【少年男子】

▽各県対抗

①愛媛県3勝 ②香川県2勝1敗

③高知県1勝2敗 ④徳島県3敗

【少年女子】

①徳島県2勝1敗(代表戦勝ち)

②香川県2勝1敗 ③愛媛県2勝1

敗 ④高知県3敗

【成年2部】

①高知県2勝1敗(勝者数) ②徳

島県2勝1敗 ③愛媛県1勝2敗

④香川県1勝2敗

◆第37回全国高等学校剣道大会

(8月2日(木)~4日(土)石巻市)

【男子団体】

▽予選リーグ 富岡西高(徳島) (5)

4 | 1 (2)安古市高(広島)、東奥義

塾高(青森) (5) 3 | 2 (4)富岡西

【男子個人】

▽1回戦

播磨メメ | 中野

(京都) | (徳島)

高野メ | 照原

(千葉) | (阿南工)

【女子団体】

▽予選リーグ 修徳高(東京) (3) 3

| 2 (3)富岡東(徳島)、西大寺高

(岡山) (5) 3 | 0 (0)富岡東

【女子個人】

▽1回戦

松永メ | 浜田

(佐賀) | (徳島)

▽2回戦

小篠香メ | 望月

(徳島) | (静岡)

▽3回戦

前田コ | 小篠香

(大分)

◆第7回全国家庭婦人剣道大会

(8月7日(火)日本武道館)

▽予選リーグ(徳島リーグ落ち)

徳島 (6) 3 | 1 (4)沖縄

田中 | 富山

○手塚コメ | 平良

○有松ココ | 赤嶺

○河野コメ | 大道

松田 | 宇良

徳島 (0) 0 | 5 (8)新潟

田中 | 村

手塚 | 丸山

有松 | 内野

河野 | 渡辺

松田 | 斉藤

◆第3回全国警察少年剣道大会

(8月8日(水)警視庁武道館)

▽予選リーグ(徳島リーグ落ち)

阿南 (5) 3 | 2 (2)新南

(徳島) | (和歌山)

小笠 | 前嶋

○湯浅コメ | 東

○仁木メ | 内野井

賀川 | 朱

○野田ト | 曾根

阿南 (2) 1 | 4 (9)神埼

(佐賀)

小笠 | 八坂

湯浅 | 野田

○仁木メ | 馬郡

賀川 | 筒井

野田 | 井上

○野田 | 井上

◆第32回全国教職員剣道大会

(8月10日(金)群馬県)

【団体】

▽1回戦

鳥取 3 | 1 徳島

久住 | 田村

薮 | 白木

○池口コメ | 本田

○山中メ | 富浦

○岸田メ | 中尾

【男子個人】

○高校・高専・大学・教委の部

▽1回戦

牛 島 メー | 山 田

(佐賀)

○中学教員の部

▽1回戦不戦勝2回戦

岩 脇 メー | 村 井

(石川)

○幼・小学校教員の部

▽1回戦不戦勝2回戦

平 井 コー | 張 間

(長崎)

○女子教員の部

▽1回戦

竹 内 コー | 浜 名

(徳島)

▽2回戦

竹 内 | メ 古 勝

(神奈川)

◆第20回全国中学校選抜剣道大会

(8月23日(木)愛媛県)

【男子団体】

▽予選リーグ

高 浦 2 2 | 1 2) 東 城

(徳島)

高 浦 (2) 1 | 4 (5) 勝 浦

(高浦予選落ち) (千葉)

【女子団体】

▽予選リーグ

阿 波 (6) 3 | 1 (1) 標 津

(徳島)

阿 波 (3) 2 | 0 (1) 大 利 根

(北海道)

▽決勝トーナメント

楠 根 (4) 2 | 2 (3) 阿 波

(大阪)

(阿波本教負け)

◆岩手県知事杯争奪全日本剣道大会

(9月9日(日)岩手県)

▽1回戦

近 藤 亘 メメー | メ 吉本政美

(宮崎)

▽2回戦

近 藤 亘 コメー | 佐々木寛

(秋田)

▽3回戦

中 野 尚 コー | 近 藤 亘

(山梨)

(近藤亘選手ベスト16)

◆第36回全日本東西対抗剣道大会

(9月30日(日)兵庫県)

西軍先鋒

近 藤 亘 メメー | コ 齊藤茂樹

(埼玉)

◆第38回全日本剣道選手権大会

(11月3日日本武道館)

▽1回戦

浦 和 人 コー | 近 藤

(兵庫)

◆第11回中倉旗(内閣総理大臣杯)争奪剣道選手権大会

(12月くにたち市民総合体育館)

▽1回戦

近 藤 反 | 梶 原

(昌武館)

▽2回戦

近 藤 ツメー | 内 田

(福生)

▽3回戦

近 藤 コメー | メ 樋 口

(福岡)

▽4回戦

近 藤 コメー | 松 田

(奈良)

▽5回戦

近 藤 コー | 権 瓶

(新潟)

▽準決勝

谷 メメー | 近 藤

編集後記

ただき玉稿をよろしくお願い致します。

▽「48国体の強化」

国体少年の部の強化は、中学生を中心に実施されて来りました。強化の対象は高校生中心になります。強化の衝に当たられた中体連の先生方には、長い間、ご苦勞さまでした、引続いて48国体強化にご助力をお願い致します。

一般の部の強化は、毎週土曜、

警察学校体育館において実施しております、会員の皆様も参加していただき激励のほどお願い致します。

▽48国体アドバイザーコーチとして範士八段佐藤博信先生が就任されました。

平成二年度の顕著な戦績は、四

▽平成二年度の顕著な戦績は、四

国高校剣道大会において富岡東高等学校女子は多くのプレッシャーをものともせず堂々の四連覇をな

しとげた。この結果は選手はもち

ろんのこと指導者、父兄並びに係者の一致協力のたまものであるうと思えます。

個人の部は県警機動隊近藤亘選手が第11回中倉旗（内閣総理大臣杯）争奪剣道大会において三位に入賞しました。

富岡東高女子選手並びに近藤選手の今後益々の活躍を期待いたします。

▽剣道・居合道昇段審査学科試験

問題・解答例の改訂をお願いし、改訂したものを掲載いたしましたので受審される方、勉強をされる方は、剣道・居合道入門書の一つとして活用していただければ幸いです。また、校正が十分に出来ていませんので問題点がありましたら指摘していただきよりよいものを作りたと思いますのでご協力はどお願い致します。

▽徳島の剣道編集順序を変更、グ

ラビヤに思い出の写真を掲載しました。発刊にあたり投稿していただきました会員の皆様方にお礼を申し上げますとともに今後ともご協力のほどお願い申し上げます。

▽徳島県剣道連盟審議委員長を務められた、伊原秀文先生が、平成三年三月逝去されました。ご冥福をお祈り致します。

（松村克隆）

▽徳島県剣道連盟役員並びに審議員を歴任され、徳島県剣道発展のためご尽力された、河野照雄先生、久保勇先生、松本一城先生の三先生方がご逝去されました。稽古をお願いした者としては、まだまだお元気でご教示をいただきたいことが多くありましたのに誠に残念に思うしだいでありませす。先生方のご冥福をお祈り申し上げます。

▽わが郷土の剣豪紹介は各支部の先生方に執筆を煩わしているところでありませす。執筆に際し資料の収集調査、現地調査等色々とお苦勞をかけていることと思ひませす。各支部の先生方におかれましては引続いて郷土の剣豪を発掘してい

発行日	平成三年五月二十七日
発行所	徳島県剣道連盟
編集	徳島県剣道連盟広報部
印刷所	グラウンド印刷